

浄土

三月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 第三機郵便物（毎月一週一日發行）
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別投承認雜誌第三五二號）
昭和三十七年二月二十五日 印刷 昭和三十七年三月一日發行

第二十八卷

第三号

浄土宗聖典

定価 送料

一、三〇〇 一二〇

法然上人研究

仏教大学編 一、〇〇〇 一二〇

親鸞と法然

高千穂徹乗著 一八〇 四〇

一遍上人法語集

武田賢善編 三八〇 八〇

法然上人御一代記

大富秀賢著 一〇〇 五〇

元祖法然上人御法語

折本 二五 一〇

京都市下京区(中央局区内)

上珠数屋町烏丸東入

仏教書林 西村為法館

電話 〇三 三三三八番

振替 京都五六四八番

☆☆信仰の「泉」浄土トラクト☆☆

新刊 浄土トラクト

在家の方々の為の

村瀬秀雄著

浄土宗勤行の解説

新書版九〇頁
定価七〇〇円
送料二〇〇円

待望の書「浄土宗勤行式の解説」愈々刊行
旧版「浄土宗日常勤行式解説」を全面的に
改訂、版も持ち易い新書版として刊行
(百部以上五分引送料無料)

大正大学教授 佐藤良智著

真理のはなたば

新書版
定価七十円
送料二〇円

若き人びとにおくる仏教入門

青年会 婦人会に最適のテキスト

東京都千代田区飯田町二ノ八

申込先 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

浄土 三月号

仏道修行は、よく／＼身をはかり、
時をはかるべきなり。

法然上人御法語



中央アジア・アスターナの
墓地（六世紀）から出土し
た動物土偶

浄土 三月号 目次

表紙……………百済観音（奈良 法隆寺）

法然上人と法難……………宮林 昭彦…（二）

随筆 涅槃会のあれこれ……………黒川 弘賢…（二六）

仏の種は彼岸から……………藤井 正雄…（六）

インドと虎のこと（上）……………春日井真也…（八）

仏教と文芸……………山下 八古…（二四）

近代高僧伝 茅根学順……………大橋 俊雄…（二〇）

指鬘外道の仏性…………………………（二三）

童話 幸子とおばあちゃん……………きりふち あきら…（二六）

実話 日本への帰還開始……………吉野 翠幹…（三〇）

一篤信者に捧ぐ……………（一九） 悪は人を喰う……………（三三）

ひな祭に思う……………（二三） 親知らずの難……………（三三）

欲楽は疲れる……………（四） 第一に始めるもの……………（二五）

仏性の味……………（一八） 童心仏心……………（二六）

悪友は怖し……………（九） 扉の御法語……………（五）

これぞ親友……………（二） 表紙の写真……………（二五）

四種類の性格……………（元）

聖典 借金と念仏……………竹中 信常…（三六）



法然上人と法難

宮林昭彦

一

法然上人のあらわれた十二世紀半頃より十三世紀にわたり、日本はふかい昏迷のあらしの中に立たされた。保元平治の乱について、榮華をほこっていた平家の末路は、朝顔の花のようにはかないものであった。もろい人生のあわれさを目のあたりにみた当時の人びとは、かぎりない悲哀と絶望のどん底に沈んでいたのである。

こうした時代のながれのなかに、専修念仏の行者法然上人の出現は、不安におののく人びとに、どんなにか、安らぎをあたえたことであろう。

墨染の法衣に身をつつんだ法然上人のおしえが、漸く民衆のなかに念仏のこえとして伝えられようとしているとき、南都北嶺の高僧たちの間では、名声の高まるにつれて関心をよせるものが多くなってきた。しかし、それはすべて理解ある

好意的なものばかりではない。むしろ憎悪と疑惑にみちた厳しい批判者の立場に立っている場合が多い。

いま、法然上人の生涯において、深いまつわりのある人と場面を思いうかべながら、一二、話してみよう。

二

まず、思いうかぶのは、かの有名な大原談義である。それは、法然上人が東山大谷に移って久しくたった文治二年に、天台の顕真大徳が、洛北大原に上人を招いて、念仏の要義について聴くことから始まる。顕真大徳の

「いかにして、このたびの生死を離るべきでしょうか」という問に対して、上人は、

「ただはやく極楽に往生をとげることです」と答えた。ついで、大徳は、

「どのようなにして、容易に往生を遂げるのでしょうか」と

重ねて問いただすと、上人は、

「成仏は困難であるが、往生は得やすいことです。中国の道綽や善導の釈義によると、仏の願力によって、われわれのごとき乱想の凡夫も浄土に往生することができのです」と述べられている。

顕真大徳は、それから百日間、大原にこもって、いろいろの著述を研究し、やがて、勝林院の丈六堂に法然上人を招いて、歴史的な対決がなされたのである。その談義に参集した主な人は、天台の智海、証真、笠置の貞慶、光明山の明遍、東大寺勸進の俊乗房重源などの明匠をはじめとして、三百余人の各宗の碩学が会座につらなつた。法然上人は、法相、三論、華嚴、真言、仏心等の諸家にわたって、修行の方法や悟りのすがたなどを、つぶさに述べて、

「これらの法は、みな義理も深く利益もすぐれているので、機（人）と法（教）さえ相応すれば、悟りを得ることは疑いありません。しかし、自分のように頑愚なものは、そのような器ではないため悟ることはできませんので、ただ浄土の教門のみが、愚かな罪深い自分を救う唯一の法門です」と説いた。この論談は一日一夜におよんで真剣にくりかえされたが、さいごに法然上人が、

「自分は、自身の力量の限界を述べただけであって、すぐ

れた人びとの修行をさまたげようとするものではないのです」と、謙虚にしかも確信にあふれて語った言葉は、顕真はじめ満座の聴衆に感動をあたえた。そして、一同によって高声念仏がはじめられ三日三夜、不断念仏が修された、といわれる。

この場面は単にドラマチックにうけとるべきものではない。仏教歴史においても、数少ないもっとも知的な論談であり、高僧たちとの対決というより、日本仏教の思想、信仰をわけける聖道門、浄土門の対決とも云い得よう。

三

さらに、法然上人在世において、つよく印象にのこるのは、専修念仏の法燈をかかげてあゆんだ道程において、激しくうけられた法難である。元久元年十一月におこされた、延暦寺衆徒による専修念仏停止の運動は

「七箇条制誡」をもって、ひとまず平穏におさまったが、つづいて、翌年元久二年九月には、南都興福寺の衆徒が奏状を捧げて、念仏禁断を訴えてきた。いわゆる興福寺奏状として知られており、笠置の解脱房貞慶上人の起筆といわれている。もとより、貞慶上人は、南都仏教復興に力をつくした人であり、弥勒信仰を通して広く世人にうったえ、戒律の復興

をさげんで仏教界の肅清をはかり、仏教を本来の在り方にもどそうとしたのである。

この点は華嚴教学の立場より、洛西桐尾にあって、華嚴と戒律の復興にあたった高山寺の明恵上人の立場と相通ずるものがある。かかる戒律を重視する態度は、九ヶ条の奏状にみられるように、はげしい批難となつてあらわれた。憤怒と迫害のあらしの真っ只中に立たされた、法然上人は、あらたな対決を迫られたのである。

しかし、それは、相前後してあらわれた親鸞、栄西、道元

日蓮などの一群の鎌倉仏教の各開祖、高僧たちがうけた場合とその性格をおのずから異にしている。いままでの宗教の私たちにおいて純粹化したといういとなみは共通であるが、日本人の宗教として、民衆のはだのなかにとけ込ませたのは、法然上人が唯一といえよう。その意味で、名利や権力の座とのむすびつきは、まったくもたず、ひたすら、口称念仏一行に生きぬいた上人の偉大さは、歴史を越えて、その時代のなかに生きつづけることであらう。

欲楽は疲れる

飢えている犬に肉の少しもついていない。血だらけの骨を投げ与えてみよ。その犬はその骨によつて決して飢えを満すことはできない。かえつてその骨のために疲れと悩みが与えられるだけである。これと同じように、官能の欲楽は与えられた者にとって、何んら栄養となることなく、ただ疲れと悩みが与えられ、苦しみと禍を生むもととなる。こう考えることが正しい智慧であつて、欲楽に執着す

る心を捨て、修行しなければならぬ。

鳥が肉片をくわえている時、猛鳥がくると、必ずそれを奪わうとする。もし鳥がその肉片を捨てずにいれば鳥は殺されるか又は大きな傷を受ける結果となる。これと同じように、官能の欲楽をあぐま

で捨てずにいようとすれば、必ず自分以上に力のあるもののために殺されるか又は大きな傷を受ける結果となるであらう。

燃えさかる大きな松明を手にとって、烈風に向つて馳れば、必ず

そのものは火傷を負うか又は焼け死ぬであらう。松明をあぐままで持つて捨てないように、官能の欲楽を手にして離さないならば、必ずや火傷を負うか又は焼け死ぬこととなるであらう。

深い穴に、燃えたつ炭火を入れ、その穴のふちで二人の男が争えば、やがては穴に落ちて、焼け死ぬことであらう。官能の欲楽はこの争う二人の如くあくまで続けてゆこうとすれば、必ず燃えさかる炭火の上に落ちて焼け死ぬこととなるであらう。

小動物が樹上で熟した木の実を食べているとき、誰かがその木を伐り倒さうとしているのに、あくまで樹上を離れないなら、その動物は怪我をするか死ぬであらう。

官能の欲楽は夢の如く、醒めた後には何も残らない。夢の中でわめき、あくまで得ようと努力することが意味のないように、官能の欲楽に執着することを止めねばならぬ。毒蛇と知つて手を出す者があるであらうか。後で苦しめぬように修行し、心の自由を得るよう

扉の御法語

仏道修行は、よくよく身をはかり、時をはかるべきなり。仏の滅後第四の五百年にだに、智慧をみがきて煩惱を断ずる事かたく心をすまして禅定をえん事かたきがゆへに人おほく念仏門にいりけり。すなはち道綽善導等の、浄土宗の聖人この時の人なり。いはんやこのころは第五の五百年、闢諍堅固の時也。他の行法さらに成就せん事かたし。しかのみならず念仏にをきては、末法ののちなを利益あるべし。（念仏大意）

何事を行うにも、自分の能力を考え、社会情勢を判断してから行なうべきです。自分の知識なり財力なり素質なりを無視して夢のような希望を持っても実現は困難であるし、無駄な労力を費すことになります。また自分一人がいかに頑張っても、結局は社会から抜けることができないのです。たとえ山奥に引きこもったにしても、自分一人だけで生活できるものでありません。仏道を修行することにしても全く同じことです。

即ち仏道を修行するには、十二分に自分を
はかり時代をはかつて行うべきであると、上
人は申されました。このはかるという言葉の
意味について考えればいろいろのことが含ま
れていることが判ります。例えば高い低いを、
深い浅いを、多い少いを、強い弱いをそれぞ
れの度合をはかることの意味があります。ま
たはかるということは、よく思考し、相談を
して道筋を考えることの意味もあります。更
には、善い悪いを判断し、批評を加えること
も、過不足のないように物事の度合を見極め
ることも、標準をたてることも、みなはかる
ということの意味です。長さは物指ではか
り、量は榊目ではかるように、自分と時代を
よく思考し判断し、その上で八万四千の法門
ありといわれる仏教の中から、自分に最も適
したものを選び出し、それによって修行すべ
きであります。

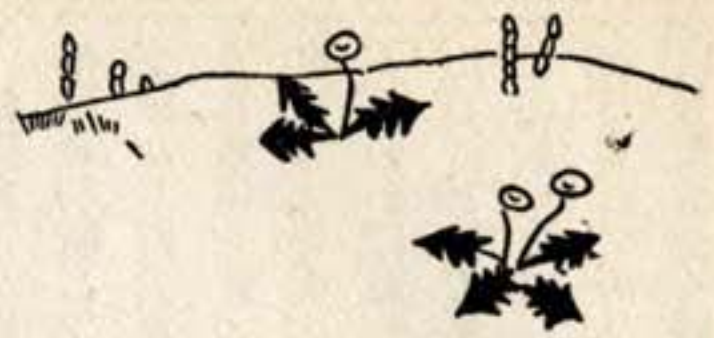
この御法語は、どの教えがよいとか悪いとかいうのではなく、唯十分に自分と時代を見極めると申されたので、全く無理なく誰にも納得できるお詞であります。

さて釈尊がご入滅になつてから千五百年の

間は仏教は正しく旺んに行われていました。それがそれ以後の一万年は仏法が次第に衰微してゆき、この時代を末法といいます。第四の五百年とは末法時代に入った最初の五百年のことです。仏教の内容は經典によって知ることができても、修行して悟るという行因証果のない時代が末法であります。末法に入ればばかりなのに、すでに智慧をみがき、それによって煩惱を断ずることが難しいことになり、善導大師の如き大先達すら念仏門の人となりました。まして第五の五百年に入って、斗争に明け暮れしている時代は、申すまでもなく念仏一門しかありません。

ところが上人のご入滅後、更に七百五十一年をすぎた今日になって、平凡人たる者はただただ上人のお詞を頂くしか外に道がありません。

念仏大意の冒頭に「末代惡世の衆生、往生の心ざしをいたさんにをきては、又他のつとめあるべからず」と申されています。そして最後に「返す返すも一向専修の念仏に信をいたして他の心なく、日夜朝暮行住坐臥にをこたる事なく称念すべき也」とあります。



仏の種は彼岸から

藤井正雄

世俗に「暑い寒いも彼岸まで」という。草木は芽をふき、菜の花が咲き乱れ、蝶や蜜蜂が春風にさそわれて花から花へ渡りゆく春の季節の到来である。春の遅い雪国でも、雪の下にはものの芽が雪どけを待機しているし、コタツに入つて大相僕のテレビを見ながらも永い冬の眠りから覚めた春の息吹きが感ぜられる。この頃になると、あちこちに白い花や淡紅色のさくらに似た彼岸桜が咲く。騒々しい都会の片隅にも、彼岸会の誦経の聞こえるお寺の塀ごしに彼岸桜の花が、春の息吹きをみせて咲いているのどかな風景に出会うことがある。

その寺の名は忘れたり絲ざくら 召波

彼岸桜はさくらに比べて幹も花もあまり大きくなく、枝の姿態は婉柔で女性的で、春を迎

えるにふさわしい花をみせる。糸ざくら、しだれざくらも彼岸桜と同種である。家では彼岸団子に舌づつみをうち、野には彼岸桜をみ、山辺には彼岸草をみる。日当りのよい山端の笹原などをかきわけてみると、ところどころに三四本、ときには簇生した鶯草が、鮮紅色の傘をみせる。実に一年のうちでもつとものどかな好季である。

だが、このようなのどかな彼岸には、人生の一大事を心から反省する意味が秘められていることを忘れてはならない。彼岸というのは、春分を中日とした前後の三日間、すなわち一週間をいい、この時分は昼夜の長さが相等しい節で、善男善女は菩提寺に参詣し、祖先のお墓に詣で、家庭にあつては仏壇に供養をささげて人生を反省する機会でもある。滋賀県のある山村では「お彼岸に大根畑に入る

と大根がくさる」という。これは単にその地方に伝えられた迷信であるとは片づけずに、お彼岸の時には、忙がしい野良の仕事を休んで静かに祖先を供養し、反省する様にと昔の人が無学無知の人に教えたものと解したい。

彼岸会の行事は印度にも中国にもなく、古くから我国に行なわれた行事で、聖徳太子のときに始まつたものと伝えられている。だが、もともと彼岸という言葉は梵語のパーラミター（波羅密）に当り、到彼岸という意味である。「二河白道のたとえ」に

はるばると西を目指して歩いてきた一人の旅人があつた。すると道の中ほどに二つの河が現われた。一つは火の河で南に、他の一つは水の河で北に、深さは底が知れず、南と北の長さもどこまで続いているのかも判らなかつた。両河の境目には一すじの細い白い道が東の岸から西の岸にかかつていた。だが、水の河の波が打ち寄せ、火の河の炎が絶えず道を焼いている。旅人はどちらへ行つてよいのか迷つてしまつた。後からは悪者や恐ろしい獣が迫つてくる。進退きわまつた旅人は、どちらへ向つても死ぬ

ことならば、この白い道を辿つて向うへ進もうと決心したときに、思いがけなく東の岸から白い道をわたるように勤める声を聞き、また西の岸からも早く来るようにという声を聞いた。旅人はようやく身も心も落着いて、疑いやひるむ気持ちを捨てて、ふりむきもせず心をひとすじに白い道をわたつた。彼の岸に至ると、そこには善い友がいて限りない喜びを得た。

とある。このたとえ話は、東の岸が炎につつまれたようなこの世の苦しみの生活、西の岸が極楽、東の岸からの声はお釈迦さま、西の岸からの声は阿弥陀さまで、真正の白道を歩めば苦しみの此の岸を離れて、さとり of 彼の岸にわたることができるといふ話である。

彼岸は、この岸である現実の生活に対する理想の世界でもある。ところがもし人生に目的や理想がなかったならば、われわれの人生は醉生夢死の生活に終始してしまふであらう。だから此の岸である現実の世界を離れて、彼の岸である浄土を憶憶して生きるのであつてはならないのである。「浄土」という「彼岸」は現実の此の岸を離れて別個に存在

するものではなく、われわれの現実を反省し、精進する力とならなくてはならぬものであると思う。いいかえれば毎日それぞれの仕事に精出し、レジャーを楽しむ生活は此の岸であり、ともすれば世俗のことに押し流されていつて自己を見失ひ勝ちな私どもが、真正の生活を目指して反省し、精進することが彼の岸にわたることに他ならない。

このように一見のどかな春の日は、同時に反省と希望の日でもある。一年の計は元旦にあり、人生の計は実に彼岸にある。彼岸は学校に入学する希望のスタートであり、学窓を出て社会に出る門出でもある。

浄土宗をおひらきになつた法然上人が師と仰いだ中国の善導大師は

念仏して西方往生の願行をなすには、冬の兩時を取らずして、春秋の二節を取る。その故は仲春仲秋は正東より日出でて正西に没す。爾るに弥陀仏の国は当に真西日没に当る。故に弥陀の在所を衆生に正しく指示して往生の願を遂げしむべし（観経疏）といつておられる。春分は丁度日の没するところが阿弥陀さまのおられる極楽の東門に当

るから弘く念仏をしなさいとすすめられたもので、過去の生活を反省し、見失ひ勝ちな自己を見出して、希望に燃えて明日を迎える日であるといえるでしょう。このような希望の日に心から念仏を唱えたいと思う。仏教は葬式や法事のときだけのものではなく、日常生活に展開されてこそ、始めて家の仏教から自らの仏教になるのではなからうか。

まけよ 藤け 仏の種は彼岸から 鬼貫

彼岸にまかれた種は、日常の生活の中に育まれて、やがて実となつて彼の岸にわたることができらるであらう。

香と線香の煙

お香を焚いたり、お線香をあげたりすると誰でも心が静まります。香や線香は仏さまのお使いである等といひます。香煙にたくしてこちらの信心を仏さまにお伝えするというわけです。たちのぼる煙をみながらご先祖さまのことを考えていると、煙の向う側からご先祖さまが、こちらを見ていて下さるような感じになります。



インドと虎のこと (上)

春日井真也

は し が き

今年は寅の年なのであるが、もとより寅と虎とはどの様な関係にあるか私には判らない。またどうしてそれが関係づけて考へられる様になったかも私は知らない。しかし今から千八百年程まえに許慎という人によつて書かれた『説文解字』という本が三十巻あつて、九千余字の漢字の成立と原義とを説明してゐる。それによると、寅の字については「正月は陽氣動き、黄泉を去り上出せんと欲す。陰尚ほ強し」云云とあつて、寅を「物の演出する義」としてゐる後漢の劉熙の『釈名』などと同じ立場で解釈してゐる。もちろんシナの文字は古いものは西紀前千年という頃の殷代の亀トに用いられた甲骨文であるが、その中にも寅という字が見えるわけで

あつて、しかも今日の寅の字の形をとるまでには種々にかわつて来てゐる。従つてその字の意味する内容も少しづつ変化してゐると考へて良さそうである。ところが虎の字は動物としての雄姿を表はしたものであつて、河南省彰徳府の小屯から発掘された甲骨文にも沢山見えてゐる。

そんなところから見ると、この寅と虎との間には全く関係がないかも知れない。しかしそのことはそのこと、今年寅の年、私の年である。長年の債務の様に心にかかつていた稿責を、虎のことを書くことで免じて頂こうと考へた次第である。虎のことを、あれこれ書いて見たい。そしてこの稿が日本とインドとを結ぶ、一つのかほそくでも、かけはしの一つともと念じる心から表題の如くかかげた次第である。

一、虎の足あと

私は、はじめて虎の足跡を自然環境の中に生きたものとして見たのは、昭和十四年春四月のことであつた。風まだ寒い黒竜江の右岸すつかり結氷して仕舞つてゐる水流のこちら側に立つて、ソ聯の町の燈火を見たあとであつた。何日あるいたことであらうか、途中で物凄い野火にかこまれ、幾時間も休止なしに追われて歩き続け、いつの間にか深い森林の中に入つてしまつてゐた。満州の東部国境、北緯四十八度、東経一三〇度半という附近であらうか。小興安嶺の支脈の雪の中に、大きな、直径二十センチもある足あとが幾つも判きりと残つてゐた。虎の足あとであつた。

そのころ、満州には東辺道の金と密林の王といふ二つの名が通つてゐた。金といふのは今は北鮮の首相となつてゐる金日成將軍のこゝとであつたが、密林の王といふのは人間ではなくて、額の縞が王という字に見えるという興安嶺の猛虎の名であつた。

動物園でしか見たことのない猛獣が、自由に歩きまわる世界に立つて、生きた猛獣の足

あとを見たときは、一瞬時間が進行をとめた様なはげしいショックを受けて、今でもその時の景色が脳裡に新鮮に再現し得る思いである。その森の中で、半ば土に埋めてつくられた伐材小屋（小屋といつても二〇〇人ほど入れる広さがある）に、そのあと二三日を暖かく寝させてもらつたのであるが、その夜の丸い月が大きく、深い暗紺の夜景に逆光を帯びて立つ檜の老木の肩に、出てゐた光景は今尚ほ忘れ得ぬものがある。外気温は零下三十度である。文化の滙てた遠く酷寒の大自然そのものの懷の中に、人とし生きる己がいのちの不思議を思つたのである。

その次は、皆既日食のあつた年であるから、昭和十七年であらうか。ところは中部シナ大陸、湖南省咸寧から南方一五〇軒、羊山紙という竹材から作られる紙の最大の集散地である通山県城内であつた。通山県城は北緯二十九度半、東経一一四度半といふ附近であらうか。日本からの皆既日食観測隊が師団工兵隊のある賀勝橋というところにやつて来ていた。この日は不幸にして雨であつた。十二時もとづくにすぎてしまつていた頃であつた

であらうか。普段でも少しうすぐらい東西に走る谷に沿つた通山県城の雨の日の空が急にグーツと暗くなつた。段々くらさが増してゆく、呼吸がとまる様な緊張感があるくらさである。朝の点呼のときは覚えていて、雨のためにいつか忘れてゐた皆既日食なのである。くらさが極まつてきたとたんに、各処で動物や鳥の声が、騒然と、静かに息をとめた様な空気をやぶつて、聞えて来た。グーツと暗くなつたかと思うと、やがえ薄紙をはぐ如くという譬の文字そのままに、瞬一瞬の時間をかさねることくもとの明るみにもどつたのである。一寸、太古の人々のもつたであろう怖畏の感を味つた思ひがあつた。

私はそのとき大隊副官をやつてゐた。やがて各部隊から皆既日食による異状の有無の報告があつた。人員・兵器には異状はなかつた。しかし不思議なことに、このとき野戦倉庫から受領してあつた副食用の生きた牛が一頭丸のまま忽如として繫索場から消えていた。これはやがて足あとから虎の仕業と判明する。このとき大隊長は山中芳雄という中佐であつた。兵団随一の豪勇をもつて鳴った山

悪友は怖し

猛獣は怖れなくとも、悪友は怖れなければならぬ。猛獣はただ身を破るにすぎないが悪友は心をやぶるからである。

山中で猛獣に出会つたときは、こちらが逃げきるか相手を倒す以外に方法はない。しかしこちらの準備と相手の種類によっては、それもできかねて負傷するかも知れない。たとえこちらが負傷しても、後の治療で直すことができるであらう。それに相手が猛獣ならばすぐに猛獣であることを見究めることができるし、最初から警戒することができ

ところが悪友の場合では、それが悪友であることを知ることが仲々難しいことがある。特に相手に何か企てることがあると、口は上手であるし態度はやさしく見える。そしてこちらの欠点に乗じてくるから、気のつかぬ内に悪友にそまることが多い。しかも一度悪友と一諸になり、その行動を共にすれば、その回復も難しいと知らねばならぬ。これ即ち悪友はこちらの心を破るからである。

口泉森の人であるこの人には大へん御世話になった。今はもう七十才に近いのであろうか。どうして居られる事であらう。懐かしい人である。

ナニッ！ 虎が！ ナマイキダ 大隊命令を出すから第一機関銃隊で射たしてしまえ。牛がさらわれるといふ事は、次は厩がやられる事である。人間がやられる事である。日本の馬も、日本人も、虎のおそろしさを知らないから、どのような大事が出来するか判らない。而も牛が消えた場所は大隊本部から二〇〇米もはなれていない。

雨が上った。翌日の午後のことである。長い初夏の日が暮れ様とする頃、機関銃隊長から電話がかかつて来た。早速電話につくと、すぐ裏の岩山に二匹の虎がねて日向ぼつこしているところを秣刈りに出ていた兵隊が見つけて急報にかえつたという。すぐ陽の沈まぬうちに一小隊を出して射つことにしたから、という連絡であった。すぐに大隊命令を起案して大隊長にもつて行く。サインが終つて命令下達の処置が完了する。銃声はない。まだかまだかと思つていると、既に薄やみが建物

の中にただよひはじめた。

ドドドドド。銃声はそれだけで終つた。暗くなつてから四人がかりで、かつぎこまれたのを見ると、頭から尾の先までで、丁度二米位であらうか。これが一匹であの大きい牛を喰わえて運び去ったのかと思い、同時に人をおそれずのこのこと住居の近くにやつて来る大胆さを思うと、身も心も慄う思いであつた。

あとで聞くと丁度側面から残光をあびて、岩に両足をかけて空際に浮び上る様にして立つたところの雄一頭に二銃を集中して射つたという。二虎を追わなかつたこの出動隊長の指揮のよさもさることながら、完全武装して秣刈りに出ていて、突如目の前の岩かげに二頭の虎を見つけて、そこから急報にかえつた厩日直兵長の理性も大いに称えられた。このときに生き残つた一匹は遠く逃げたらしくそれからずっと姿を見せなくなつて、やがて忘れ去られてしまった。

射たれた虎は、その夕直ちに分解されてしまつて、その肉は在通山の各隊に配分された。もとより機関銃隊へは「英勲」という銘

酒一本が大隊長から贈られた。このとき私は、はじめて、虎の肉と肝とを味わつたのである。一寸一種の異臭があるけれども、何という事もなかつた。その虎の足裏は身体に似合わず大きく、そして四肢は意外に太かつた。動物園に見るものの比ではなかつた。自然に生きる猛獣の必然なのであろうか。それにしてもこの虎が大きな牛を如何にして運び去つたか今になおわからぬ気がする。

その次はインドの虎の話である。時は昭和三十五年秋十月、処はビハール州王舎城外にある霊鷲山道である。北緯二十五度、東経八六度といふところであらうか。

私たち家族に同行することになった在インドの日本人学生諸君二三人を加えて、久しぶりにガヤに出かけた。そこから二十軒ほど離れた仏陀成道の聖地とされてゐるブッダガヤにおまいりしたあと、完全に舗装された坦々たる直線道路をラージギリに車を飛ばせた。ラージギリは昔の王舎城のあとである。そこではからずも、ここから二十軒ほど離れたナールンダに新設せられた仏教学研究所以らやつて来てゐた長崎法潤君に出会つた。彼の云

うことによると、私も旧知であるカンボジャ
図の比丘のゴーシャナダ君が、先日満月
の夜、靈鷲山道で虎に出会った恐怖で発熱し
て、まだ起き上れないまま、ラーシギリのピ
ルマ寺で寝ているといふことであつた。私た
ちはみんなと大声を出して笑つた。

そのあと、やはり丁度此処に来ていたもと
熊本大学の植物学教室の助手をしていた旁ら

熱心な日本山信者となつて、そういうことか
らセバグラムのガンジー翁のアシラムに來
ることになった前田行貴君に聞くと、彼も或
る日、太鼓を打って朝早く靈鷲山に向つて上
つてゆくと、ガサガサと眼前の藪がゆれて、
そこから二匹の虎が現われ崖を横ぎつて山の
彼方に、飛ぶ様に抜けて行つたことがあると
いうのであつた。

これぞ親友

人は親まねばならぬ友と、親んではならな
い友とを、見わけなければならぬ。親んでは
ならぬ友とは、よくのふかい人、言葉
のたくみな人、へつらう人、浪費する人で
ある。親しまねばならぬ友とは、まことの
助けになる人、苦樂をともにする人、忠言
を惜まぬ人、同情にとむ人である。

親友は持ちたいものであるし、親友は大切
にしなければならぬ。しかし親友とはどん
な友達かを見分けることが第一のことであ
る。単に仲がよいからといって、親まねばな
らぬ友とは限らない。

しかし相手ばかりに親友たることを求めて
も実は得難いものである。友は友を呼ぶとい
う通り、親まねばならぬ友を求めるには、こ
ちらも亦相手からみて、親まねばならぬ友た
り得なくてはならぬ。

助けになり、苦樂を共にし、忠告を惜まず
同情に富む人が真の友なら、まず以て己れも
亦かくなるように努力しなくてはならぬ。欲
深く浪費する人を嫌うなら、自分も努めて反
省をしなければならぬ。

人はとかく相手ばかりを責め勝ちである。
相手を悲難する前に自分自身をよく見究める
必要がある。人は相見互であるという。人に
は性質の相違があるけれど、努力によつて親
友たることができるのである。

私たちは、その日はお釈迦様の時代から既
に有名になつていたバイパーラ山のふもとに
湧きつづけてゐる温泉につかつて、ゆっくり
休養をとつて、翌日未明に靈鷲山に登ること
にした。ここは昔、太古の時代には、火山で
あつたと思われる五山（實際は六山）にかこ
まれた盆地に、二千三百五十余年前、マガダ
国のアジャセ王が首都として経営した堅固な
天然の要害の地が旧王舎城である。もとより
盆地の中に於ける收容能力の制限から、現在
はこの旧王舎城には一般住居はなくて、その
五山盆地の出口にある温泉から三軒ほど離れ
たところに現在のラジギリ村がある。そして
その昔、営まれた新王舎城は、その途中に、
厚い城壁に、かこまれた一軒平方の遺跡とし
て保存されてゐる。旧王舎城を南に抜ける道
に沿つて途中から東に外れると、仏陀時代に
名外科医として有名であつたギールバ大臣邸
跡に出る。ここは近時の発掘によつて、大規
模な病院と見られる遺構が見出されることに
なつたからその昔は野戦病院として用いられ
たことがあつたのであろうか。そのギールバ大
臣邸あとから一軒ほど行くと、道は山にかか

って昇り坂になる。この坂道がピンビサーラ道と云われいて、観無量寿經に説かれる王舎城の悲劇の主演ピンビサーラ王が、釈尊の常住説法の土地といわれる靈鷲山の地を訪ねるために作つたといわれる道路である。山にかかつて約一軒ほどあろうか。その道路沿いに細くなされる水流がある。ゴーシャナダ比丘が虎を見たというところの附近の水流の湿地には、尚おまざまざと、大きく虎の足あとが残つていた。まだふみたてのように新鮮な大きな足あとであった。ゆうべも出て来て虎がこの道を通つたのかも判らないと思われたほどである。私たち日本人は幸にして虎のおそろしさを知らない。それはただ動物園で見ただけの虎を眼で見て頭で考えるおそろしさに過ぎない。そのあと、たびたびゴーシャナダ比丘に会う機会があるが、彼にその時の話を聞くと、今でも唇の色をかえるほどまざまざと恐怖の色を表わして、虎のおそろしさを語るのである。そして彼は皮膚に浮ばせた粟つぶを示しながら、本気になって、君はそんなにノンビリしてこの話を聞くのだが、それは日本には虎がないからだろ。

私はもう虎に会うのはコリゴリだと云うのである。そして彼は、私はまだ幸に恐怖から立直つたが、私と一緒に虎に出会つたビルマの丘比は、そのときのショックから病気になつて、とうとう国にかえつたという。アジアの人民が、幾百・千年のあいだ血から血にうけついで来た先天的・後天的の虎に対する畏怖・恐怖の心情の内面意識をのぞき見る感にした次第である。

その王舎城一帯の地は、明治三十五年（AD一九〇二年）十二月より三十六年一月に亘つて、一代の英傑大谷光瑞西本願寺法主の、仏跡調査の苦心のあとである。この一行は今から六十年も前、ガヤより象隊を組んでやって来て、茨をわけ道をつくつて靈鷲山の遺跡にも訪ねて居られる。島地大等・藤井宣正という後に大学者となる若き日の二人が、苦心して調査に従つたことが法主随行者であつた上原芳太郎氏の印度通信に見えてゐる。これは大冊の新西域記上巻四三―八一頁に収められてゐるが、その中にも虎のことが書かれてゐる。虎に畏怖する土人を安心させるために多数の石油空罐をたたきながら、草深い岩山

をよじて、仏跡調査の苦心を記してゐる。

私たちがインドに来て三年目であつたらうか。私はたびたび南インドの知人からニル・ギリの山奥でとれた虎の子でも豹の子でもよいから、もらつてほしい。安全な箱に入れて汽車で送りどけるから、という御親切な申し入れに悩まされたことがあつた。その子虎も子豹も、ともによく人になれていて生れて六ヶ月目だという。一寸食指が動かないこともなかつたのであるが、やめておいてよかつたのかもらつておけばよかつたのかまだ自分ではどちらがよかつたのか判らない。虎でも豹でも毛皮が美しいから首環をつけてつれ歩けたら楽しいであらう。インドでは時々そういう人も居るらしく、私もカルカタでもベナレスでも見かけたことがある。またマドラスの動物園の虎は飼育係によくなれてゐて、大きい虎が全く猫のようになつてゐる。そうになると虎も決して猛獣性ばかりの動物ではないらしいことが判る。毛皮となつてゐるものの毛なみの触覚とは全く異つた感であつた。（印度ビスバ、プハラティ大学教授、文学博士）

ひな祭に思う

桃の節句というけれども季節感からすれば可成りずれている。陰曆三月三日は今年なら四月七日に当たっているわけで、止むを得ないことである。まだ薄寒い陽さしの廊下におひな様があらちちと勝手な方向にむけられたまま、娘たちに塵を払ってもらう。その中で三十糎以上もあるのは、祖母が所蔵していたものである。大ききこそ際立っているが、素朴で丈夫で、どことなく頑固なきつさのあるおひな様である。

祖母がまだ幼い頃の話に、ある街角で大刀を抜き放った二人が真剣勝負をしていたのを目撃したさうである。明治維新をきり抜けて今日までこうしているには、おひな様も並大ていの苦勞でなかったに相違ない。

それに較べると、娘たちのおひな様は、なりも小さく、はるかに美しい着物をつけている。これは初めての娘が誕生した時に、私の母親が祝ってくれたものである。十数年前に亡くなった母親であるが、これを贈られた時の温情を、まるで昨日のことかのように有難

いものに思い出す。

上の娘が二才の時に、消化不良と肺炎とを併発したことがあった。その時分には今のような薬があるわけもなく、私の血液を毎日注射して漸く直ったものである。仕事を終えてから病院にゆき、陰気な病室で採血してもらったのだが、これが数日続いた時には我ながら情けない思いであった。

それから数年たって、戦争がますます激化して行つた。私がいつものように仕事を終つて帰ってきて、ガラリ玄関を開けるや否や、赤紙をみせてくれたのも娘であった。いよいよ応召と私が玄関を出る時、何も判らないで一諸にゆくのだとせがみ、他人の涙をさそつたのも娘であった。私もその時は、これが見

納めになるのかも知れぬと、娘たちの顔を眺めたけれども、運よく召集解除となつて帰つてきた。その時は娘たちがどう成長したかを見るのが一番の楽しみであった。ところが私が帰宅すると、娘たちは隣家に逃げて、家に入ろうとしなかった。なるほど子供にしてみれば見知らぬおじさんというばかりでなく、まっ黒な顔に鬚をつけて、険しい目付をし

ていたのだから、怪しい男の乱入と思つたのも無理のないことであつた。

どういいきかせたか、騙したかして、やつと娘たちは家に入ったが、私を恐れる風は当分続いた。それから幾星霜たって、病気になるたり直ったり、卒業したり入学したり、怒ったり笑ったり、それこそ夢中に暮してきてしまった。

しかし年一度しか顔を合せないおひな様ではあるが、その時ばかりは常に元気で対面してきた。あるいは白酒も菱餅もなかったこともあつたが、折角の対面におひな様を淋しからせたこともなく、いつも節句の来るのが楽しみであつた。

娘たちが成長して、娘たちの手で塵を払い飾つてきたのだが、今年からは再び私たちの手で出入れしなければならなかった。それというのも娘たちが嫁に行くのに、おひな様を連れて行かなかつたからである。狭い部屋住いに、ひな壇が飾れないという理由であつた。この夏には初めての孫が生れさうであるがそれが女子であつたにしても、私はおひな様を贈るわけにはゆかぬと思つている（野須）

仏教と文芸

山下 八 古

「……人間は生きていくにつれて、様々な運命を展開する。ただ一つ人間は等しく死に向って行進しているという他には、何一つとして分りはしない。」

そんな不測の運命を、人間の知恵で計算しようとしても、無駄であろう。或いは愚の骨頂といえるかもしれない。

さらに限らない欲望をもった人間が、死に向って生きて行くのである。そんな人間の日々が不条理でない筈はなからう」

昨年の七月二十八日、最後の最後まで小説の筆をすすめ、ついには口述筆記によってでも、その文芸の道を歩みつづけて逝った、芥川賞・野間賞受賞作家、外村繁氏の最後の著書「濡れにぞ濡れし」の一節が上に引用した文章である。

江州の古い商家に生れ、ひとときは商人としての路を歩いたが、敢然として一切を投げすてて文芸の世界に入ってから、苦難の年月を経てようやくそのむくいられようとした矢先、不治のガンに蝕まれて、ついに逝ったのである。しかも、その夫人もまた同じくガンのために、半年の後に夫の跡を追うようにして亡くなったのである。夫婦が存命中、お互いのガンの不運をなくさめ合って、「クヨクヨしてもしかたがないよ。病氣は医者まかせ、運命はほとけさんにまかせて、この一日を大事に生きようよ……」

といていたとのことである。その著書「濡れにぞ濡れし」は氏の自叙伝風の身辺小説だが、その数ヶ所に、親鸞聖人の歎異抄の文句が引用されている。青年時代の悩み多い頃、壮年時代の苦難の折、人生行

路の行きなやみに際して、心のよりどころとしてくちずさまれているのである。

文芸と仏教とのかかわり合いの仕方には、ふたとおりある。一つは、僧門に関係を持つ人が文芸の道を歩む仕方である。もう一つは仏教に文芸の素材を求めるという仕方とである。近來は、武田泰淳、丹羽文雄、今東光、寺内大吉といった僧門出の人々の文芸への進出が目立っている。これ等の人々は、いづれも、時おり、または常に、素材をも仏教——といってもその多くは、現実社会の寺院と僧侶についてであるが——に求めている。しかもその多くの場合、話題の種となるのは、僧門という特殊社会の暴露性にあるのである。いわば、素材の珍奇さ、一般に余り知られない内面の公示というところに、興味が集中するのである。

こうした仕方は、仏教にとってはむしろ迷惑なことなので、仏教でも何でもない一つの特殊職業の紹介にすぎない。世人は仏教というものと僧侶・寺院とを同一視しているから、そこに誤解も生れるわけである。いってみれば「自虐趣味」であって、真実の意味で

仏教信仰の文芸化ではない。

それよりも、上に外村繁の例をあげたことでわかるように、自らの生きてゆく道に、また、おのれをふりかえっての人間観に、脈々と流れる仏教の諦念こそ、一人の人間を描い

第一に始めるもの

この宇宙の組立がどういうものであるか、この宇宙が永遠のものであるか、やがて無くなるものであるか、この宇宙は限りのない広いものであるか、それとも限りがあるものであるか。社会の組立がどういうものであるか。この社会のどういう形が理想的なものであるかなど、これらの問題がきまらないうちは道を修めないというならば、だれも道を修め得ない内に死が来るであろう。これらは緊切な人生の問題ではない。

喩えば人あって、恐ろしい毒矢に射られたとする。親戚のものや友達が集まり、急いで医者を呼んで毒矢をひき抜き、毒の手当をしようとする。

ところがその時、その人が「しばらく、矢を抜くことを待ってもらいたい。誰がこの矢

でそれがそのまま仏教を活かしているということになるのである。信仰というものが、単なる筆先や、口先きだけのものではなく、みづからがその中に生きてゆくところにこそあるのだということを反省したい。ガンにおか

を射たのか、それを知りたい。男か女か、どんな素性のものか。また弓は何であったか、大弓か小弓か、木の弓か竹の弓か。弦は何であったか、藤蔓か筋か。矢は藤か葦か、羽根は何か、それらのことがすっかり解るまで、矢を抜くことを待ってもらいたい」というならば、どうであろうか。

いうまでもなく、それらのことが解ってしまわないうちに、毒が全身にまわって、死んでしまふに相違ない。この場合にせねばならないことは、先ず矢を抜いて、毒が全身にまわらないように手当をすることである。

この宇宙の組立がどうであろうと、修むべきものは修めなければならぬ。この社会のどういう形のものが、理想的なものであらうとなかろうと、身に迫った火は避けずにいられない。

宇宙が永遠であらうとなかろうと、限りが

され、自分の死をみつめつつ「ほとけさんまかせだよ」といい切れる、そうした生き方が、そのまま仏教を語るものだといいたい。そして、真実の意味での「仏教文芸」でもあるのである。

あらうとなかろうと、生と老と病と死、愁い悲しみ苦しみ悩みの火は、現に人の身の上におし迫っている。人はまず、この迫っているものを払い退けるために、道を修めなければならぬ。

仏の教えは、説かねばならぬことを説き、説く必要のないことを説かない。即ち、人を説いて、知らねばならぬものを知り、断たねばならぬものを断ち、修めねばならぬものを修め、悟らねばならぬものを悟れよと教える。

それゆえに、人は問題を選ばなければならぬ。自分は何を第一の問題としてとりあげるのか。それには最も自分に押し迫っているのは何のであるかを見きわめて、これを知らなくてはならぬ。こう考えてくると、第一に手がけることは自分の心を養うことであるのを知る。そしてこれは自分の仕事の始まりであり終りであることに気がつく。



隨筆

涅槃会のあれこれ

黒川 弘賢

陰曆二月十五日の涅槃会は、今では旧ねはん会と呼ばれ、今年は三月二十日に当たっているわけであるが、多くは三月十五日に行われている。

この日とその前後一週間ほどに吹く西風をネハンニシ（涅槃西風）と呼んでいる。

これは古くから伊豆地方をはじめとする「船ことば」として知られたものだが、その外に「ねはん吹」「お釈迦のねはん風」とも呼ばれている。

これは西方は浄土を指すところから、釈尊ご入滅の日に浄土から現世に訪れとして吹く風ということ、信仰上の意味がある。

またねはん会と前後に降る雪を「ねはん雪」と称し、これが雪の降りじまいというところから、雪の果、名残りの雪、雪の別れなどと呼ばれる。このようにねはん会が一般の生活と密接な関係をもっているが、特に農村では

この時期が農事開始期に当り、永い間の冬も終り静から生への活動期に入る季節の境目でもある。

涅槃会に雪垣払う田寺かな 三幹竹

ねはん会や皴手合する珠数の音 芭蕉

ねはん会は申すまでもなく、釈尊が五十余年の永い化導を終え入涅槃された陰曆二月十五日に、各寺院で行われる法会のこと、この日ねはん像を掲げ、遺教経を誦する。

奈良興福寺や大阪四天王寺では、この法会を常楽会と呼び、京都大報恩寺では遣教会と称している。

拾芥抄にはこの日を三仏日の一つであるとして次のように説明している。

「涅槃とは寂滅なり。天竺にては仏になるを涅槃という。夫を唐土のことばに翻譯して

寂滅という。寂とは円寂の義、滅とは滅度の義なり。是一切の煩惱を滅し尽して、諸業まどかに止みたるを、円寂とも寂浄ともいう。是不生滅の悟りなるゆえ滅度という。然れば寂滅とも涅槃とも同意なり。」

また常楽とは常楽我浄の略で、常と楽と我と浄との四つは仏の証得した四徳である。遣教会とは、釈尊がご入滅に際して、弟子たちに最後の教誡をなされたところから称されたものである。

印度や西域にも各種のねはん像が遺存するのを見ても、仏入滅の忌日に当って供養報恩をつくしたことであろう。中国ではかなり古くから行われていた。仏祖統紀第三十三に見えている。

わが国では推古天皇の時、奈良元興寺で修行されたのが最初であるといわれているが、今では地方によって各種の習俗がある。

信州や越後では、ねはん会に寺で餅をまいたり、参詣人に分けたりする。近畿地方ではねはん講と称して会食する。子供たちが家家を廻り米や銭を集めて会食するが、その時歌う文句が面白い。即ち「ねはんの雀、銭など

米など、すっぱとおしやれ」又は「ケンケン
ドンドン豆おくれ、豆がなけりやボリ(焼米)
おくれ、ボリがなけりや簀おくれ」という。

この日の供物にコナ餅や団子を作ったり、
正月の餅をあられに切って、これをあぶって
供えたりする。これらの供物を「仏のハナク
ソ」と呼び、この供物を寺からもらうことを
「ハナクソモライ」という。

日次紀事に

「民間には、旧臘造る所の餅花を再び煎りて
仏に供す。俗誤りて釈迦の鼻屎と謂う。実は
花屑なりという」

とあるが、その他多くの古書にも記録がみ
られ、ハナクソとは花供御の訛りであろうと
もいわれている。

さて、八十才を過ぎられた釈尊は、雪山下
の故郷に向って、北へ布教の旅を続けられて
いた。その途中、食中毒で発病された釈尊は
阿難のすすめによって、クシナガラ城の沙羅
の林に入られた。そして雙樹の間に頭を北に
面を西に、右の脇を下にして足と足を重ねて
臥床せられた。釈尊は善賢なるお弟子に最後

の得度を行い、更に「我汝等に告ぐ、諸行は
実は無常なり、努力して大成せよ」と最後の
遺教をされ、静かに涅槃に入られた。

その時、日月は地に落ち、世界は盲闇の昔
におちた如く、人天共に号注し、雙樹の枝は
ことごとく垂れて釈尊を覆い、葉は白く変じ
時ならぬ花をつけて悲しんだ。この白い葉が
鶴の如くであつた。この故事からねはん会を
雙林の夕、鶴林の夜半、鶴の林と呼ぶわけ
である。

しろしろと寝釈迦の顔の胡粉かな 虎子
ねはん図には金剛峯寺、金剛三昧院、東福
寺、泉湧寺等有名なものがある。どの図をみ
ても猫が描かれていないのが普通である。

わが好きな猫がをらぬや涅槃はん像 月尚

釈尊ご入滅の日、天から蓑袋が下って沙羅
の枝にかかった。誰もこれをとりに上るもの
がなかったが、一疋の鼠がその蓑袋の紐を切
るべく幹に上った。すると下にいた猫が飛び
ついて鼠を喰ってしまった。釈尊は天与の蓑
を口にすることなく入滅されたが、猫はその
罪で図から除かれたという。

しかし東福寺の兆殿司筆ねはん図には猫が

描かれている。兆殿司は毎日精魂こめてねは
ん図の完成を急いでいたが、ある日一つの絵
具が足らなくなつて、ハタと当惑してしまつ
た。彼は自分の飼猫が毎日仕事場にきて、彼
の仕事に熱心にみているのに気がつき、冗談
半分に猫に向つて「お前もこの図の中に入れ
てもらいたいなら、足らない色を探してくる
がよい」といった。その日から猫は姿をかく
してしまつたが、数日たつて猫が不足してい
た絵具をくわえて帰えってきた。彼はそのお
かげでねはん図を描き上げたが、約束通り図
の中に猫を描いた。その絵具の出たところは
東福寺の東南にあたり、後世その場所を絵具
谷と称した。

鼠とる涅槃はんの猫とながめけり 言水

しかし増上寺所蔵のねはん図にも猫が描か
れているので、まだ外にあるかも知れない。
大山の麓の茶湯寺には、等身大の木像ねは
ん像がある。小さな本堂の薄暗い内陣で、寛
の音以外は聞えぬ静けさの中に笑を含んだ寝
釈迦を拝すると自づと頭の下がる思いがする

山寺や誰も参らぬねはん像 橋良

この寝釈迦には漂流譚が伝っている。

ある日、常陸の水戸近くの漁師が海に出て
いると、網に大きな寝釈迦がかかった。彼は
早速自分の家に持ち帰って祀った。それ以来
大漁が続き、漁師は喜んでいたが、ある夜の
夢で、釈迦が相模の大山に行きたいという
知らせをうけた。そこで彼は講中をつくり、
茶湯寺に移した。なおこの木像はもと寛永寺
にあったものだが、上野の役の難をさけて、
川に流したものと伝えている。

茶湯寺は、そのため涅槃寺と呼ばれること

仏性の味

同じ牝牛でも赤、白、黒といろいろ毛色の
異ったものがある。しかしどの牝牛から乳を
しほっても、乳は同じ色をしている。

このように人々は顔つきが違い、性質が違
つているばかりでなく、その境遇によって生
活が違っているので千差万別である。見たと
ころは一人として同じ者としてないが、しかし
皆同じ仏性を具えている。

むかし雪山に貴い薬があつて、その味も極
めて甘かった。しかし薬は深い草むらの中に
かくされていたので、誰もこれを見つけない

になったが、この地方には誰か亡くなると、
その百一日目に遺族がねはん寺に詣る風習が
ある。口碑によれば

「亡者が百一日目に遺族の者がお詣りにきて
くれるのを、大山の石段で待っている」

「百一日目に大山の寝釈迦様に行けば、途中
で亡くなった者とよく似た人と会える」

「遺族の者は亡くなった人の趣好物を持って
きて、途中で似た人にくれるものだ」

などといわれている。この信仰は大山を中

とがでなかつた。ある時一人の賢人が、薬
の芳しい香をかぎつけ、それをたよりにして
遂に貴い薬の在所を見つけた。彼は桶をつく
り、それに薬を集めていた。しかし賢人が死
んでからは、誰も再びそれを見つけない所を
知る者がなかつた。その内に桶が次第に腐っ
て、中にあつた薬が流れ出した。薬はだんだ
んと流れて行ったが、その通る場所によつて
同じ薬でもいろいろと雑多な味をもつようになつた。

仏性もこれと同じように、平常は煩惱とい
う深い草むらに覆われている。そのために人
々は自分の奥深くに仏性があるということ

心としてかなり広い範囲にゆき渡っている。

いつか筆者が訪れた時に、若い母親が菓子
と果物、そして玩具を両手に抱えて淋しく石
段を登ってゆく姿がみられた。この婦人は子
供を交通事故で亡くし、百一日目にお詣りに
きたことを後で知った。今でもその時のいた
いたしい後姿が目にとまづいている。大山の
寝釈迦さまも、こうした交通事故を一番憂慮
なさっているに違いないだろうし、また是非
とも輪禍をなくさなくてはならない。

知らないままに探し求めようと
する者があつたにしても、容易に見つけ出す
ことができない。そこで仏さまがきて、深い
草むらをきり開いて下され、人々に仏性のあ
ることを示された。

仏性は香りも芳しく、味も優れているが、
人々が仏性のあることを知るためには、どう
しても、煩惱という草むらを通り、いろいろの
場合にあらわなくてはならない。そのために初
めは一つ香りと味とであつたものが、実際に
人々によつて知られる時には、種々雑多な香
りと味に変わったものとなってしまう。純すい
の仏性は賢人たる仏さま一人しか知らない。

一篤信者の靈に捧ぐ

宮本与三松さん、貴方は真実の布施行を私に教えて下さいました。貴方は心と身体で親切（慈悲）という施しをなさいました。そして何の報酬をも求められませんでした。その証拠には貴方が人様の悪口を言はれるのを永い間一度も聞いた事がありません。人に親切にして例え言葉だけでも御礼がないと大抵の人は小言か悪口を言うものです。それが貴方には全然ありませんでした。

貴方はまた物の施しもして下さいました。毎年御忌の御通夜に出す甘酒の茶碗が足りないかと分ると、善導寺の寺名入りで三百個も私の知らない間に注文なさって持つて来て下さいましたのは三年程前でした。本堂の小鉢が足りないと思ふと立派な箱火鉢を五個も持つて来て下さいました。この箱火鉢を開んでいろいろの人たちが、いろいろの相談や談笑をいたします。炭火と共に貴方の親切心がホノボノと参詣者の心を暖めて呉れるでしょう。

その外御詣りの度毎に御本堂で使ふヤカン二個、バケツ三個と云う様に持つて来て下さるし、御忌御十夜には毎夜貴方の持つて来て下さった三百匁ローソクが御仏の御顔を、そして参詣人の顔を赤々と映し出して呉れたものです。これらは寺へすると云うより仏様にさして頂く、人様に喜こんで頂くと云ふ全くの信仰に培われた布施の菩薩行でした。

貴方は寺へそうされた計りでなく村の人にも亦さうであつた事を常日頃から察して居りましたが現に隣近所の人も仰言つていました。以前からそうであつたが殊にこの三年程は人様に親切で何か下心があるのではないかと人から疑の目で見られる程親切にされた由です。ですからお葬式の日も村中の人から亦会葬をなさつた親類縁者の人々からも慈父を失つた様に惜しまれていました。「人様には親切にしておくものだ。人様には喜んで頂くものだ。みんな好いも悪いも自分が背負つていくのだから」と家の人にも教え、人様にも言つて居られたとか。言うは易く行ふは難い布施行が立派に貴方の上に生きているのを誠に尊い事に思います。

亦普段は人一倍の働き者で大して大きい身体でもないのに仕事の上では病氣が出るまで一生懸命精出されました。薪ものも二三年先のものまでチャーンと準備をし然もお客様でもある時は惜しげもなくどんどん囲炉裡へ薪をくべられました由、殊に炭焼きにかけては近郷近在でも貴方の右へ出るものはありませんでした。「炭俵の真中まで一本も折れたのがなく一緒なものが揃えてある。宮本さんの炭を使つていると外の人の炭はとても使えない」と言ふのが皆んなの様に言う合言葉でした。そしてその炭焼の現場はカマの内も外もまるでお寺の庭の様に綺麗に掃き清められてあつたとの事、好い炭の出来るのもさこそと領かれると同時に仕事の中に生きる御念仏を私は見さして頂く気持ちです。

今日のお葬式には皆んなが空を仰いで貴方のお徳を今更の如く偲びつつ念仏の声もいと朗かに葬列のお伴をしています。

宮本さん、どうぞ発願文の言葉をそのままに再びこの土に帰つて苦の衆生を救ふために御力を御貸し下さい。（福井県大野市、善導寺大門俊我投）

近代高僧伝

茅根学順

大橋俊雄

「礫山の両大師」と言はれたのは誰あらう、野沢俊間と茅根学順であった。兩人は常に影の形にそうが如く、宗政にも育英にも陰となり陽となつて、良く協力して宗門の大事業を企てて完成させた。明治二十年七月貧民私立

いたが、どちらかといへば俊間が表の人であるに對して、学順は陰の人であり、陰の力となつていた。

同和学校を建て、又免囚保護慈善会の創立にあつても仲良く創立委員に顔を並べているし、更に浄土宗本校を芝から小石川に移したのも、又仏教の教義に則り広く女子の指導をなそうとした輪島聞声をたすけて淑徳女学校を創建した際にも、将又浄土宗全書の刊行にあつても二人は常に陰の力となつて働いて

学順は嘉永四年三月十五日、穴戸藩茅根寅三郎の次男として、江戸川関口台町にあつた旧藩主の本邸でうまれた。藩主は、松平大炊

頭頼徳といい、穴戸藩は、水戸の西凡そ二十里にあつた水戸の出城というような関係におかれていた。彼は幼名を鋪次郎かみといったが、十四歳の時故あつて養国寺の清水学明を拜して出家し、名を学順と改め、長じて増上寺に掛錫し、新谷の学懋寮で宗学をまなび、明治二年十一月伝通院玄順の命をうけて、竹早町の光岳院に住したのが、そもそも彼が伝通院と

関係を結ぶ最初であり、同九年真珠院に転住した。彼がここに住した頃の真珠院は住職を失い、荒れるにまかせたボロ寺であつたが、

どちらがどうということはないに互に尊敬しあい、互に意見をかわし、仕事をはじめに當つては何等協力をおしむということは微塵もなかった。年齢は僅か一年学順が長じて

それにもめげず彼は父の菩提と、水戸の天拘騷動に命をすてた人々の菩提をとむらうために、立身出世をのぞまず、唯ひたすら仏の道につかえ、生涯を黒衣でおし通した。俊間と水魚の交を結ぶようになったのは、二十年五月俊間が小石川の同じ伝通院山内にあつた浄台院に住した頃からであつたらしい。そして常に表おもてにたつことを好まなかつた彼は、

「何事をするにしても長になることは嫌いだ。副でないと仕事ができない」と口癖のように言つておられた。

「長が発表した場合は変更するということはないけれども、副の場合には事態によっては長と再検討した上で答えましようとか、未だ長の意志を確認してないから確証を得てから答えたいというように、未だ変更の余地が残されているから、自由に良きように変えることができる。又副という立場は表面にたつことはないから思ひきつたこともできるし、意見を述べることもできるから、仕事のやり甲斐がある」

と申されていたが、その本意とするところは誰人でも納得のいくように、そして反対者



もなしに万事がスムーズに行はれるようにしたいというのが彼の念願であった。

仕事には極めて熱心であり、熱情をもって事をすすめたが、その反面非常に短気でおこりっぽい性質でもあった。檀家の法事の時のこと、施主は何かの都合で約束の時間におくれ、五分十分とまったが、お参りにくる気配さえない。そこで彼は施主にかまはずに回向をはじめた。そして施主が来たときには万事がすみ、時に彼は「今何時だと思っていなさる、回向はしておきました塔婆をもってお墓にお参りしておいで」といったきりで内にひっこんでしまった。こともあれば、また余り勝手な注文をする檀家があると「そんなことはわしには出来ない、そのようにやって下さ

るお寺さんに行きなさい」といって断ったこともあるという。増上寺で何か重大な会議が開られた時のこと、それは冬であったが、大僧正は「アンカ」に入り、一般の僧侶たちは座布団にタバコ盆で相談がひらかれようとしていた。

時に彼は「宗門にとって大切な会議だというのに、この始末では何で重要な相談ができるか、おいほれ坊主め」といって、此の座の雰囲気にいたく立腹し、タバコ盆をけとばして帰ってしまったこともあり、そのように短気でおこりっぽい彼は何時か「けし炭」というニックネームをいただいたという。

彼の日常は夏は三時におきて四時看経、冬は四時起床五時看経というのが生涯を通じてのおつとめであり、毎月三・十一・十六・十七・二十一・二十四の六日を「お供養日」と定め、自分で精進料理をこしらえ、御霊前にそなえ、寺内の者には勿論、時には人をも呼んで供養されしかもそれを上手にこしらえて食べさせるのを自慢としていた。また彼の居間の長火鉢のドーコには何時も湯がチンチンと沸いており、ふいていないと機嫌が悪るか

った。それというのも何時いかなる時客人があっても、熱いお茶がだせるようにと心がけていたからで、しかも火鉢の炭は全部自分がつぎ、他の人にまかせるということはなく、炭にしても佐倉炭を用い、きちんと一寸二分にきらせていた。

正月の如き十一日の藏開きまでの来客には親類、知人、檀家をとわず誰でも座敷にあがった人には、紅白のお餅をいれたお汁粉を差上げるのを例としていたが、これとて彼の喜びをとともに分ち合うという暖かい心情の発露からであった。

かたくなまでに自分の意志を通した彼の信念は貧民の救済と宗門の復興をねがう心情のあらはれであり、彼の手がけた全ての事業は「両大師」あってこそなしとげることのできた宗門百年の計ともいうべき大事業であったが、その彼がまた俊閑と時を同じくして昭和八年十二月二十九日世を去ったということは一誠にくしき因縁ともいうべきであらう。時に世寿八十三、法名を宝蓮社済普上人度阿普宏学順老和尚という。

指鬘外道の仏性

舍衛城に一人の婆羅門がいた。彼は博識を以て有名であった。彼は多くの人々から尊敬され、五百人の弟子をもっていた。この弟子たちの中でも、上足の弟子の一人に無害というものがいた。無害は立派な体格を持っていた。力も強く、みるからに堂々としていた。また豊かな才智を持っている上に、性質は温順で、顔かたちが人並以上に優れていたから、多くの弟子の中でも一際目立った偉丈夫であった。彼は師の婆羅門に次いで多くの人々から愛されていた。

婆羅門の妻は年も若く美しかった。ある日婆羅門が外出中の時に、その妻は無害の許に行つて、日頃の思いを打ちあけた。無害は驚いてこういった。

「たとえにも師は父に当たるといいます。さすれば師の夫人は母に当たるといふべき方でありましょう。大恩ある師にかくれて、夫人と道ならぬ恋におちたとしたら、弟子たる道に逆

くばかりか、人としてあり得ぬ罪惡であります。私は夫人のお氣持を受け入れることはできません」

すると夫人は更に口説いていった。

「主人は世間から尊敬され、毎日を忙しく暮しています。しかし妻の氣持を少しも察してくれません。私はずっと前から、あなたを愛していました。あなたが主人の許に来るだけでも、私の心は乱れ、私の心のおどるのをどうしようもありませんでした。私はあなたが欲しくて毎日を苦しんでいました。飢えている者には食を与えるでしょう。渴いた者には水を与えるでしょう。今私はあなたに飢え渴いているのです。あなたが私を癒して下さるのが、どうして道に逆くことになるのでしょうか。私の苦しみを救って下さい」

無害は夫人の執心に困りはててしまい、遂には言葉も荒々しく、こういった。

「師は夫人を愛されています。私が夫人と狎れ狎れしく親しむことは、私は毒蛇を身にまとっているより恐ろしいことです。夫人と時を過すことは、私にとって毒を呑むのと同じことです。私にできることと出来ないことの

あるのがお判りになりませんか」

無害が烈しくいい放つて、夫人を拒絶したので、さすがの夫人も顔色がなく、恥しい思いからいいようのない怒りに燃えた。夫人は面を伏して自室に帰ったが、無害に対するうらみが段々さかんになって、何とか仕返をしようと思った。そこで夫人は自分で自分の衣服をビリビリ引き裂き、怒りに身を震わせて寝台に入つて、夫の帰りを待った。夫が帰ってくるや否や、大声で泣きわめいて、こう訴えた。

「あなたが普段から讃めている小賢しい弟子から、私はこのような辱しめを受けました」

婆羅門は愛する美しい妻から訴えられて、嫉妬のために逆上してしまった。そして如何にしてこの復讐をするかを考えた。彼は無害に最も兇惡な殺人を犯させ、それによって現世においては重い刑罰を受けさせ、来世においては地獄の苦しみを与えさせようと考えた。彼は無害を呼びよせてこういった。

「汝の智慧は、既に道の堂奥に達している。しかし最後になすべき一つのことが残されている」

「その一つとは如何なることでしょうか。願くは、速かに教えて頂き、それを行いたいものであります」

「その一つとは、劔をとって四辻に立ち、百人の生命を断つことである。そして一人から一指をとり、百指をつないで首飾りとせよ。」

然らば汝の道は完全に具るであろう」

こう厳かに命令すると、一ふりの劔を無害に授けた。

無害はやむなく劔を受けたが、師命に従えば社会の秩序を壊すことになり、師命に違えば弟子でなくなる事が明かであった。如何なる理由でかかる無法なことを師が命ずるのか彼には判らなかつた。彼は死なんばかりに懊

悩した。フト気がつくとき彼は四辻に立っていた。彼の心は平静を失い、煮えかえるような烈しい怒にかられ、狂人のように劔を振った。そこにたまたま通りかかった人が彼のために切り殺されていった。

それからというものは、無害はこの上もない兇人と化した。彼は悪鬼羅刹の如く振舞った。来る日も来る日も四辻には死屍があつた。たちまちにして全市は恐怖に満ちた。彼が指を集めて、首飾りとしたところから、誰いともなく、彼を指霊と呼んだ。

○

祇園精舎にいた釈尊は、指霊の噂をきかれ彼を救うために四辻に向われた。釈尊はその

親知らずの難

世に「親知らず、子知らず」といわれる難所がある。こうした地形の上の難所でなくて、母といえども子を救うことができず、また子といえども母を救うことのできない場合がある。それは即ち、大火災と大水災と大盗難の三つである。こうした場

合でも、親は子を子供は親と互に助けあう努力ができる。いかに災難が大きかつたにしても、助け合う機会はあるので、苦心して助けることもできる。ところが助け合う機会すらない真の「親知らず、子知らず」がある。それは老の恐れ、病の恐れ、死の恐れ、の三つが襲い来った時である。

と、釈尊は

「世をあげて双向うてきても、恐れることはない。いわんや一人の賊が何であろう」

といわれ、更に道を進まれた。

その頃、無害は九十九人を殺し、九十九指をつないで首飾りとし、最後の一人を待って四辻の近くにいた。無害の母は、息子が無類の兇人と化し、指霊と呼ばれることを聞いて心を痛めながら淋しく暮していたが、子の帰りを待ちわびて、彼を探しに四辻に向つていった。

無害はあと一人殺せば満願となるので、誰か来るのを今や遅しと待っているところに、彼の母が通りかかった。目のくらんだ彼は、母であることを知りながら、いきなりおどろ出して、母に飛びかかろうとした。その時、釈尊は静かに彼の前に立ちふさがった。彼にしてみればもう一人殺せばよいので、相手は誰であろうと問うところでない。彼は前に現われた釈尊に向つて、劔をふるって迫った。彼が勢込んで迫ると、スーッと釈尊は彼から離れた。またもどると釈尊は彼の前にいた。彼は自ら疲れて思わず叫んだ。

とその男がいう

「出家よ、しばらく止れ」

「無害よ、余は前からここにいる。立ちさわいでいるのは、汝のみではないか」

彼はうめいた。釈尊は更に

「汝は、無智なるが故に、人の命を害しているが、余は無限の智あるが故に、街路にあつても平静である。余は汝を救うためにここへきた」

釈尊の声は燃える炎に水を注ぐ如くに、無害の心に注がれた。無害は悪夢からさめたように我にかえり、劔を投じ、大地にひれ伏して釈尊の弟子となった。

○

一方バセーナデイ王は、兵を卒いて無害を探していた。王は祇園精舎に着き、無害を求めたが、釈尊から彼が今やよい修道者となっていることを教えられた。王はいった。

「世尊は、常に慈悲をもって悪逆を伏し、悪人をも包容せられる。希くは世尊よ、この上とも民を導きたまえ」

ある時、無害は鉢をとって街に食を乞うたすると街は再び恐怖の巷となり、一人の妊婦は驚きの余り産気づいて苦しんだ。釈尊は彼

にいった。

「無害よ、汝は直に行つて女に語れ『私は生れてからこのかた、一度も殺生をしたことがない。そのことが真実ならば、汝は安かに産むであろう』と」

「世尊よ、私はこれまで九十九人の生命を断ちました」

「無害よ、道に入る前は前世である。生れて以来というのは、道に入ってから、という意味である」

彼は直ちに女のもとに至つて、釈尊の言葉のように語った。彼女は安らかに産んだ。その帰り道で、彼はうらみのある人たちから、石や瓦を投げられ、杖や刀で傷つけられた。辛うじて精舎に帰つた彼は、

「世尊よ、私はおろかなために、多くの人命を害い、洗つても清くならない血の指を集めて、指環と呼ばれるようになりましたが、今や三宝に帰依し、真実の道に入りました。馬や牛を馴らすのには杖を用い、象を仕込むには鉄鉤を使います。然るに世尊は何も用いず

残酷な私の心を訓練して下さいました。雲に覆われた月が、晴れて光を現わすようなもの

であります。

私は、いま悪のむくいを受け、負うべき責を果しました。正しい法を聞いて、忍ぶ心を養いました。今更人と争うことはありません。世尊よ、今、私は生きようとも思いませんが、死のうとも考えません。ただ時の至るのを待つのみです」

釈尊は彼の言葉を聞いて

「余の弟子の中で、速かな理解力を有する者は無害である」

と讃められた。

○

無害は立派な素質を持っていた。しかし誤まった教えに導かれ、邪悪な女の執念に禍されて、世にも恐るべき人となった。それが一度、釈尊の導きを得るに及んで、自らも雲がはれて、月光が輝き出したように、もともと持っていた素質が現われたのである。これは仏性というものである。

釈尊の弟子となつて修道し、彼を捕へるために来つた王がその姿をみて、彼を許したばかりでなく尊敬までしたのは、すでに彼の仏性が現れていたからである。

写真の紙表

空腹の美

百済観音 奈良 法隆寺

近頃若い人の服装は映画に左右されやすい。マリリン・モンローの映画が来ると、街行く美女は必要以上に胸をふくらませ、極端に胸をしめ、おしりをふくらませてゆらゆらと歩く。ヘップバーンの映画が来ると、髪をクルット巻き上げ、太い足に細いズボンを無理につけて歩く。本当に滑稽である。

オシヤレは変つたものを着て人様の注目を引くことではない。猿に振り袖を着せたところで、似あうものでなく、猿はチンチャチャンコを着るところに愛らしきがあるのである。人間様のオシヤレも要はよく着こなして相手に清潔感を与えなければ意味をなさない。身についたオシヤレは全く気持のよいものである。そしてそれは人の真似をしても出来るものではない。だから色黒でズン胴、しかも大

バーンの真似をしたところで似合うわけがない。

どうにかして美しくなりたいと望むのは人間誰でも抱いている本能であろうが、いくら科学が進んでもそれには限度がある。そこで何とか美しく見せたい。人目を引きたいと服装に注意をするようになるのであろう。自信のないものほどそれが多い。

それはともかく、このような感情が重なつて、ついには一つの理想像を作つて行くのである。そして満たされない自分の気持を満足させるて行くのである。そこにはもはや人間的なものが失われてはいるが、何処かに人間的な嗅みが残つていないといけない。そういうものを人間は愛するのである。しかもその愛は時間的に変つて行くのである。

百済観音はあまりにも有名な仏像である。

細そりとした体にやさしい小さな顔、頭部と腹部を心もち前に出した「く」の字型のスタイルはやや不自然で、何となくお腹のすいた感じを与えるけれども、長くたれた宝冠のヒラヒラと下半身をつつんでいる衣のひだは浅く直角に彫りこまれている刀のあとと対象的

であり、何げなく指先で水瓶の口をつまんでいる左手と、いかにも救済してあげましようとしてズットさし出している右手、柔らかな蓮弁をふみしめる細そりした足は、いいようのない調和と美しさを表わしている。このような美しさは飛鳥彫刻の一つの特徴であるが、それにしても上代人の信仰が、そんな美しい仏像までも作つて行つたという情熱は見逃がすことができない。

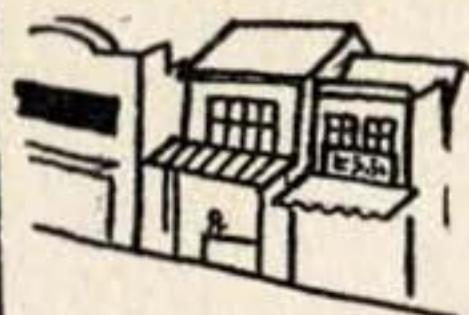
この時代の仏像の多くは正面から拝むように作つてあるけれども、百済観音は側面から見ても不自然でないように考慮されている。光背の支柱が水々しい若竹のような感じを与えるのもその証である。

三月といえはお雛祭りの季節である。近頃はインスタント流行で、紙のお雛様からカッパのお雛様も出る始末である。もし仏像を集めてお雛様を作るとすれば百済観音は最高点で当選するだろう。美貌といい、おつとりとした静かさの中にある品といい、如何にも慈悲深い態度は入選よりも台裏様にふさわしい貫祿十分である。



根足の日本人がモンローやヘップ

幸子とおばあちゃん



きりぶち
あきら

幸子は、おばあちゃんと二人きりで暮らしている。

「サチッ。」

台所で、おばあちゃんが団子鼻の方まで老眼鏡をすり落として、上目使いに幸子を呼んだ。

「サチッ。」

何度呼んでも、幸子の返事はない。

（どこへ行っちゃったんだろ。ほんとに遊んでばかりいて。）

おばあちゃんは、歯の抜けた口の中で、ぶつぶつ言う、手を拭きながら縁側に出た。

（たまには家の手伝いをしてくれても、よさそうなものだ。）

おばあちゃんは、きよろきよろとあたりを見廻して、

「サチッ。サチコッ。」

と、また、しゃがれ声で呼んだ。

「なーに。おばあちゃん。」

その時、幸子がぬーっと家の横から、顔を出した。

「なーにじゃないよ。おばあちゃんが声をか
らして何度も呼んでいるのに、この子ったら

返事もしゃあしない。」

「だから、なによ。」

幸子は、両手に持ったノートと鉛筆を、縁側において腰をかけた。

「市場までお使いに行って来ておくれ。焼とうふに油揚げ二枚だよ。」

「今すぐ？」

「そうだよ。晩の支度をするんだよ。」

「そんなの、おとうふ屋さんが来たら、買えばいいのよ。」

幸子は、ふくれて下を向いた。

「それじゃあ間に合わないんだよ。いつ来るかわからない、おとうふ屋さん待っていられないよ。」

おばあちゃんは、じりじりして言った。

「だって。あたし。いま理科の宿題をやっているんですもの。」

幸子は、ノートを開いて見せた。

おばあちゃん、一瞬だまったが、また肩に力を入れると、

「勉強、勉強ってお前。買物に行くぐらいいいだろう。」

と、言いかえした。

「ええ。いいわよ。だけど、きょうは駄目。太陽について調べているんだから。お日様が沈む前にやっちゃわなくちゃあ。」

幸子は、縁側から立ち上がった。

「そうかい。なら、

いいよ。頼まないよ。ちっとも、おばあちゃんを助けてくれないんだから。」

おばあちゃんは、哀れっぽい声を出すと、左手で団子鼻をぐしゅっとこすった。

でも、いいあんばいに、おとうふ屋さんが、それからまもなく来たので、おばあちゃんは、むしゃ

くしゃする心を押さえる事が出来た。それでも、心の中では、

（まったく今の子どもときたら、なんだかんだと理窟ばかりうまくなって、あきれる。）



と、ほそほそ言っていた。

そのあくる日、幸子が学校から帰ってみると、おばあちゃんはいなかった。

「あら。おばあちゃん。どこへ行ったのかな。」

幸子は心配になって、茶の間へ駆けこんだ。おせんの上には広告紙の裏に鉛筆で書いた手紙が、おやつと一緒にのせてあった。

これから、おとうさんの会社へ行って、お金をもらってきます。晩の支度は出来ています。それまでには帰ります。

おばあちゃんより

手紙には、そう書いてあった。

「なんだ。ああよかった。おとうさんの会社へサラリーをもらいに行ったんだ。」

幸子は、ほっとして、おやつのビスケット

をかじると、両手を枕にして縁側に寝ころんだ。ほかほかした太陽は、目をつむっても目の中が赤くなる程だ。体じゅうがとけそうなあたたかさである。

幸子のおかあさんは、幸子が生まれると、すぐに死んでしまった。おとうさんは船員でめったに家に帰って来ない。

幸子は、おばあちゃんといつも二人きりだ。それが一人ぼっちの留守番。柱時計の音だけが、カッチンカッチンと響いて、なんだかよその家にいるみたいだ。

幸子は、うとうと眠ってしまったが、陽がかげったので、目を覚まして時計を見た。もう五時を過ぎている。幸子は、大きく背のびをすると、風呂場へ行った。

（おばあちゃん、もうすぐ帰って来るから、お風呂でもわかしといてあげようかな。）

そう思うと、おばあちゃんが鼻をくちやくちやにして、喜ぶ顔が目に見えた。

「よし。お風呂をたいておこう。」

幸子は、ひとりで嬉しくなってきた、井戸端へ走った。

「エイショ。コラショ。」ポンプを押して、

バケツに水を入れると、風呂桶にザーとくみこむ。一回、二回、三回……何往復かして、もう一杯だろうと風呂桶をのぞくと、まだ半分にもなっていない。

「うあ。まだ半分か。」

幸子は、セーターの袖をたくし上げた。

（でも、おばあちゃんが帰って来ないうちに、お風呂をわかさなくちゃあ。）

また「エイシヨ。コラシヨ。」ザザーと何回も何回も水を運んだ。運んではのぞき、運んではのぞきしているうちに、どうやら風呂桶が一杯になった。

（さあ。今度は薪をわって。）

鉈で薪を細かくわると、新聞紙を焚口につっこんだ。マッチをすって火をつける。

（うわ。消えそう。消えそう。あー駄目だ）

幸子は、ふとためいきをつくと、薪を全部出して、始めからやり直し。手がすすで真黒になったが、また新聞紙に火をつけた。

（早くしないと、おばあちゃんが帰って来る）

幸子は、気が気ではなかった。

おばあちゃんのびっくりする顔を思い浮かべて、今度は消えないように、うちわであお

ぐ。しめたつ。ポツと火が薪に燃えついた。（これでよし。いつ、おばあちゃんが帰って来ても、万事オッケー）

幸子は、石炭をくべると風呂場から離れたそれから、暫くたって、おばあちゃんが帰って来た。

幸子の思った通り。おばあちゃんは、目をまん丸くして叫んだ。

「まあ、まあ。サチッ。お前。お風呂を一人でわかったのかい。へー。お前が……」

そう言っ、幸子のおごを両手ではさんだ機嫌のいい時する、おばあちゃんの癖である。

「痛いよ。当り前じゃあないの。さあ、おばあちゃん。早くお風呂にはいって。」

幸子は、少し照れくさくなったので、おばあちゃんの手をふりほどこうとして、おばあちゃんの手の上に、自分の手を重ねた。

その手は、ビックリする程ガサガサだったが、おばあちゃんの濁った目に、涙がうっすら光っていた。

その晩、布団にはいっても、おばあちゃんには、嬉しそうだった。

「サチ。お前もいいところがあるんだね。お

童心仏心

一、暴力はいけないでしょ

美仁が幼稚園から

「ただいま」

と、元気よく帰って来た。

母親は、美仁の元気の良い声を聞いて安心し、しょんぼりして帰ってくると、

（何かあったんではないか）

と、心配する。

「おかあちゃん、今日幼稚園で園長先生にほめられたよ。」

「そう、よかったね、どうしてほめられたの」

「おかあちゃん、山田りゅうじちゃん、ほく、たたいたの」

「それで 美仁 どうしたの」

「ほく にげたの」

母親にしてはいささか心外である。

「どうして たたかえさなかったの」

「でも ほうりよくは よくないでしょ ほくにげたので えんちようせんせい ほめてくれた」

ばあちゃん。あつたかいお風呂に、すぐはいれるなんて、殿様になったようだったよ。」

そう言われて、幸子もにっこり笑って、隣に寝ているおばあちゃんの顔を、しげしげとみつめた。

「おばあちゃん。ずいぶん皺があるのね。」

「何を言うんだい。おばあちゃんの縦の皺はね。サチが生まれた時。それから、おかあさんが死んだ時。サチがチフスにかかった時。おとうさんの船が台風にあつた時なんか、そんな心配するたびに出来たんだよ。」

おばあさんは、ザラザラの両手を布団から出して、自分の顔をなでた。

「ふーん。それなら横の皺は？」

「横の皺はね。あははは。これは楽しい、嬉しい時の皺だよ。おばあちゃんが、おじいちゃんの所へお嫁に来た時。サチの七五三の時それから……みんなでお墓参りに行った時」

おばあちゃんは、ここまで言うと、幸子の方へくると首を廻して、

「そうだ。今度のお彼岸には、おとうさんも帰って来るだろうから、そしたら、みんなでお墓参りに行こう。ね。サチッ。」

と、布団から乗り出すようにして、少し大きな声で言った。

「うん。そうだね。行こうよ。おばあちゃん……。おとうさん、早く帰って来ないかな。」

幸子は、天井をむいて、ぶつんと言った。

そんな幸子を見て、おばあちゃんは、

「サチッ。足をおばあちゃんの布団の中へ入れな。あつたかくしてやるから」

と、足に力を入れて、布団を少し持ち上げた。「いいよ。おばあちゃんこそ、寒がりの癖にそれにお風呂から上がったばかりだもん。」

幸子は、おばあちゃん足の上に、自分の足を乗せた。でも、それでは、おばあちゃんが重たいだろうと思って、自分の足をおばあちゃんの足の下に入れなおした。そして、

「おばあちゃん。きのう、お使いしないでごめんね。宿題があつたんだ。」

と、低い声で言った。

「いいんだよ。わかっているよ。しっかり勉強するんだよ」

おばあちゃんは、団子鼻を布団の中にかくすようにして言った。幸子とおばあちゃんの二人だけの夜である。(水口正宏画)

二、大きいみかん

近所のあきらちゃんてつちやん。小さいみかんを一つづつ手にして

「この みかん 三時になったらたべるの」

と、いつていたが

三時になるのが待ちきれなくて食べ出した。

美仁も みかんをあげたところ、あきらちゃんやてんちゃんのより倍も大きな みかんだった。

「おかあちゃんほくおみかんいらぬい。」

「どうして」

「でも ほくのおみかん あきらちゃんやてつちちゃんのおみかんより大きいでしよ。」

みんなに悪いからほくいらぬいよ。」

大ていの幼児なら大きいみかんをもらって友達に見せびらかしていばりたいものなのにみんなに悪いから ほくいらぬい。と云う相手の気持をくむ思いやりの気持、これはみほとけ様の大慈悲のお育てをいただいていたことと合掌念仏させていた事であった。



ラーゲルの思い出

第八話

実話 日本への帰還開始

吉野 翠 幹

掘り出した石を割って、これを籠の貨車ま

で運んで積み込む作業は、単なる重労働でなくて、私たちに課せられた苦役であった。監督はハツパをかける昼と夕刻ノルマをはかる時にだけ来て、作業中は姿をみせないのも、初めから無理を承知のことであつたに違いない。五十分間働いて十分間休憩するわけだが、休んでいる時の方が身体が疼いてたまらなかつた。殊に手首の痛みは激しく、具び作業にとりかかつて数回鉄鎚を振るまでは油汗を流す思いであつた。中食のための大休止は一時間であるが、ドロドロに煮られた燕麦を大急ぎで腹に流し込み、食器を洗うと、毛皮の防寒外套にくるまって。凍てつく大地にころり横になれば、すぐ睡入ってしまった。私

たちは苦しいとか辛いとかいうより、意地一つで働き通した。

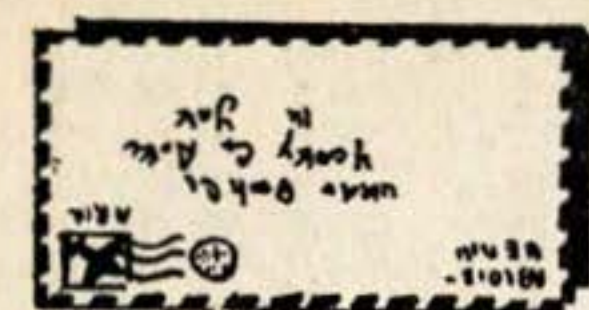
こんな苛酷な筋肉労働に毎日を明け暮れしていると、思考力が鈍り、何も考えるだけの余力がなくなっていた。スパイの成績をあげて、そのために重労働を免除され、管内で清掃の係となつた宮本中尉のことも、また反対に密告されて拘引され、食事の匂いと飢えにさいなまれた後藤少尉のことも、誰一人考える余裕がなかつた。来る日も来る日も身が粉になるまで機械的に働き続けて、冗談一ついふ者もなく、愚痴一つもらす者すらなかつた。こんな日を送っている間に陽気がゆるんで防寒外套が重く感じられる頃となつた。丁度その時分、共産グループの活動は第二段階を終り、第三段階に移って行った。これはいわ

ば最終的な仕上げの段階であつた。従つて彼等のもつていた方法も変つた。例えばグループ員とその他の者とで、作業の内容に差別をつくつたり、ノルマ達成の度合によつて食事の量を加減するという方式を中止した。将校作業班に対しても、石積みの作業をやめさせて、普通の土木作業を当ててきた。私たちは石山から解放されて、同じ十字鋸を振うにしても作業中に笑い声が聞かれるようになったのは久し振りのことであつた。

また、その頃は約二ヶ月に亘つてソ連の共産教育を受けたものが続々ラーゲルに帰つてきたので、オルグ団の人員も三十名位になつていた。彼等には一室が与えられ、そこで共産主義宣伝の仕事をしていた。彼等はいかなる労働も作業も免除されて己が任務に専念す

ればよいので、いわゆる専従者であった。

大隊本部の外にオルグ団本部という組織ができてから、第一の仕事は日本に通信を許可することであった。このことが発表された時は、夢ではないかとばかりに驚き且つ喜んだウズベック共和国そのものが世界の僻地であるのに、そのまた山奥のアングレンにとにかく丈夫で生きていることを、日本の家族に知らせることができるのである。終戦後すでに三年目を迎えたというのに、全くの音信不通であったから、家族たちは私たちの生存を半ば諦めているかも知れなかった。そこへ無事元気と通信できたら、家族たちの喜びはどんなであろうか。



私たちは軍事郵便で慣れているから、決して余分なことを書きたいとは思わなかった。「拝啓、ごぶさたしましたが僕はますます元気です」の一行を書くだけで十分なのであった。これだけの文字を書くにしてもその一字一字にあるだけ

の愛情と万感をこめて書くわけである。こうした自分の文字が家族の手許に届いたならば家族はまた私たちの気持を十分汲みとってくれるであろう。そればかりでなく、私たちが生きていることを知れば、必ずや再会の日があることを信じ、その日のくることを夢みてくれるであろう。だから、通信を許可されたことは、何時かは私たちが日本に帰れるといふことを発表されたと同じことである。しかも帰れる日が案外近くにきているのかも知れぬと考えられた。私たちの頭の中は、魚が水を得たように急に活気づいて、それからそれへと連想していった。私たちの生活に張り合いが生れたわけであった。

かくてラーゲル内の空気は一変した。誰の顔も明朗さをとりもどした。あちこちで肩をたたき合って談笑している姿が見られるようになった。お互に元気づけている話の内容は聞かなくても判るし、皆同じことを話していた。医務室で加療中の病人は、みるみる内に回復していった。作業の能率も自然とあがっていった。

やがて待望の通信用紙がラーゲルにきた。

第一回は百枚程で、人員の一割にすぎなかったが、皆同じように喜んだ。この通信用紙の分配方法と通信文の検閲はオルグ団に任せられた。オルグ団は通信許可の権根を握って、睨みをきかすことができたかも知れないが、ラーゲル内の喜び方は、そんな問題を気にかけない程に大きかった。やがて次々と用紙の配給が行われ、約一月程後には全員の手に渡った。その後も引き続いて用紙の配給があり、私は前後を通じて四回通信文を出すことができた。しかし私が涙をこぼさんばかりに書いた通信文は、結局どこに行ってしまったものだろうか、事實は家族の手許には一通も届いていなかったことを、日本に帰還し、余程後になってから知ったことである。

オルグ団は終日営内にいて、恐らくは研修に励んでいたであろう。夜になると座談会や研究会の集いを催していた。若い元気なものは、さすがによく出席していたが、大ていの者は昼間の労働で疲れているので、出席しない様子であった。そのオルグ団の活躍ぶりの内、私たちの目にとまるものといえば壁新聞の発行であり、白壁にいろいろと書きたてる

宣伝文であった。宣伝は文章ばかりでなく腹のつき出た資本家ややせ細った労働者の絵などを白壁に描いていた。ある時、医務室の壁一ぱいに大きく天皇陛下の漫画を描いたことがあった。四米位の全身図で、片手には大きな鞆をさげていた。天皇は日本資本家の親玉であり、財閥の雄であるから、持ちきれぬ財宝を鞆につめて、大衆の蜂起を横目でみながら逃げ出してゆく図であった。その画が描かれて三日目のこと、鞆に菊のご紋章がついて

いたが、そのご紋

章だけが誰かの手

によって石灰で塗

りつぶされてしま

った。

いかに漫画とは

いえ、余りにも露

骨な図なので、皆

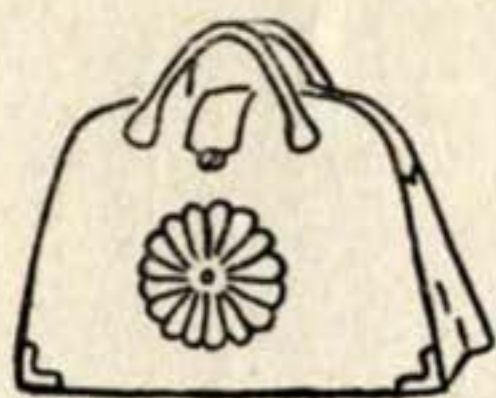
苦々しく思っていたが、遂に誰かが反応を示

したわけであった。当然その犯人探しが行わ

れるであろうが、誰もが犯人の見つからぬこ

とを祈っていた。それと同時に、犯人のことを

を初め、漫画について誰も口にしないし、話



題にもならなかった。つまり要らぬことは喋らぬが第一で、口に出したことは即ちオルグ団に通ずるからであった。天皇を侮蔑したことを批判することは、不敬罪に当るわけですからそれこそ世にも恐ろしい罪として処断されるだろうと思えたからである。それだけばかりでなくオルグ団のいうことを批判することは許されなかった。ソ連自体のあり方を真似ている以上は、それも当然のことで私たちはつまりらぬ嫌疑を受けたくなかったし反対することを許さぬ事柄は全く批判の外であった。

しかし翌日、早くも犯人が見つかった。即ち、菊地兵長がソ連に拘引されたので、菊地兵長の仕業と知ったわけで、その意外さに皆驚いた。菊地兵長は少年航空兵出身で、年も若くまた小柄であったが、何よりもラーゲルきつての美少年として誰知らぬものはなかった。性質も温和で誰からも愛され、笑えばほんとに溢るるばかりの愛嬌があった。彼は医務室勤務をしていたので、グループの中にあつては古参の方であった。

ラーゲルはいい知れぬ淋しさに包まれてし

まった。愛する弟が拘引されたという感じであつた。それと同時にオルグ団が、相手かまわずソ連に売り渡す非情さに対して憤りと怖ろしさを感じた。

その後一ヶ月位して菊地兵長がラーゲルに帰ってきたので、一同ホッとした。しかし明朗闊達な美少年であつた彼が、まったく物いぬ人と変ってしまったことに目をみはったものである。私たちが何か話しかけたり質問しても、彼は啞のように唯黙っていた。その内、自然に伝ってきた噂によれば、彼は拘引されてから、かつての後藤少尉のような食糧責めには会わなかったけれど、ある時は拳銃をつきつけられ、あるときは大声でとなられて、特別任務をおびたスパイになれと強要されたさうである。彼が釈放されたのは、結局そのスパイ任務を承諾したからであろうが、恐らくその悩みと今後における恐れのためにかくは黙して語らぬ者となつたのかも知れなかつた。

やはりその頃のこと、オルグ団は吊し上げを行った。そしてその犠牲者は小野軍医少尉と古賀主計中尉であつた。

もともとラーゲルにおける軍医は特別待遇であった。それというのもソ連軍医が一向に信頼されず、日本の衛生下士官程度であったから、事実上医務室の管理は彼一人の仕事であり、その上ソ連側からも招かれて診療を行っていた。それだけ温床にいたともいえるしその上呑気な彼は放言ぐせがあった。更に彼は当然営内勤務であるのに、帽子に鶏冠をつけないことがオルグ団から睨まれる原因となった。彼は人が好いだけで、思想的な頑固さがあったわけでないので、吊し上げにあった時、一たまりもなく頭を下げてしまった。早速に共産主義賛成の署名をして、帽子に鶏冠をつけたことも無理のないことであった。

もう一人の古賀中尉は高商出身で、九州炭坑で人事管理をしていた人である。見掛けは長身瘦軀であったが、身体は頑健そのものでまっ黒な顔にはいつも笑いを消さなかった。そして強い近視眼鏡の奥には鋭く光った眼があった。また彼は文才に恵まれ、ラーゲルの誰もが愛唱していた「アングレンの歌」を作詩した点から、他のラーゲルにも名前を知られていた。彼は自分の主張を固持しないかわ

り、オルグ団とも同調しなかった。彼は吊し上げにあっても遂に節を曲げなかったのも、彼は一やくラーゲルの注意人物となった。

吊し上げというのは、人民裁判のことで、誰も知る通り大衆の名をかりた集団暴力であった。ねらわれた小野少尉なり古賀中尉なりは、高い壇上に一人立たされた。その前の前列にはオルグ団が並び、うしろには数十人の同志が会場を埋めていた。代表が質問するわけであるが、その内容は簡単なもので、要するに自己批判を強いるものであった。質問に対して何か答えようとすれば、満場が一せいにどなり、詰り、罵倒した。最初から答弁を聞くなり議論をしようというのではなく、大ぜいの怒声で相手を威圧すれば、それでよかったのである。しかも二十分、三十分と壇上に立されたままであったから、小野少尉がまっ青になって震えたにしても無理のないことであつた。

その次にオルグ団の行ったことは、個々面接であつた。これは会社等に就職する場合、幹部たちの前で口答試問を受ける風景と全く同じであつた。つまりオルグ団は四組に分れ

悪は人を喰う

鉄の錆が鉄から出でて、鉄自身を喰うように、悪は人から出でて、人を喰う。

刀剣も鉄であり、火箸も同じく鉄ですが、刀剣は幾百年たっても、その輝きを失わないばかりか、美術品として尊重されています。刀剣はまず製作されるときから、よく鍛えられ、しかも常によく手入れされています。従って刀剣からは錆を生じませんが、普通の鉄はすぐ錆びて、自然と全部が錆びてゆきます。それと同じように、人がもし何か悪いことをすれば、悪は更に悪を呼んで、遂にはその人を喰い亡します。学校で勉強せず、会社で怠けていれば、自然と相手にされなくなりま

す。農園で手を抜けば雑草のみ繁って田園を喰いつぶします。不親切な人、好んで争う人は、遂には孤独となって淋しく消えてゆきます。自分の利得のためには他人の迷惑を意に介しないならば、その人の利得も少ないものとなってゆきます。自分のためにも他人のためにも悪を遠ざけたいものであります。

て、各組が一人一人に面接するわけで、大抵一晩に十二三人づつを呼び出していた。この面接を行う理由としては、個々の思想を調査してそれをソ連に報告するためで、日本帰還についての参考資料とするという口上であった。即ち下手なことを答えると、帰還が遅れるかも知れぬという暗示を与えていた。

面接といっても、ラーゲル全員について行くものでなく、今以て帽子に鶏冠をつけていない者だけに限っていたから、さして日数を要しなかった。私がこの呼び出しを受けたのは、いよいよ面接も終るという最後の組であった。六名のオルグがずらり列んでいる前に一つの椅子があり、そこに座らせられた。

オルグのいうこと、行うことに反対すれば、菊地兵長でないがソ連側に拘引される恐れがあるし、いらぬ意地を張って日本帰還を遅らせることもないので、私は最初から温和しく彼等のいうことを聞く決心をしていた。

「あなたはソ連の待遇をどう思いますか」

「こんな境遇になったのは最初のこと、これが善いのか悪いのか、比較するものがないので判らないし、国際法も知らない、何

んともいえない」

「あなたはソ連の建設事業に参加して、どう思いますか」

「生きている以上は働くのが当然だが、同じ苦勞をするならば日本再建のために働きたいものだと思っている」

「あなたはヒロヒトを、どう思いますか」

「天皇陛下は国の中心であるから、有難いお方だと思っている」

「おなたはアメリカを、どう思いますか」

「アメリカはかつての敵国であり、戦いが終わったからといって、すぐ仲よくなならない」

「あなたはどのようにして共産主義に賛成署名をしませんか」

「ここにあるスターリン主義その他の本は全部読んでいます。失礼だが唯物史観や共産主義について多少なりと勉強したのは、君等よりずっと古いのだ」

「それなら、その当時の共産主義とわれわれのそれとはどこが違うと思いますか」

「違う所などありません」

「それが違うのです。われわれの場合は、単なる理論でなく、日本に必ず革命を起すとい

う目的を持つところに特色があるのです」
その他いろいろの質問があつて、三十分位かかつて終った。

いよいよ夢にまで見た待望の日本帰還が開された。第一回には、約百名のものが指名された。僅か百名であつたが、誰もが自分が帰れるかのように喜んだ。そして内地に帰ったら、是非とも自分が健在であることを家族に知らせて欲しい。住所はこれこれであると熱心にたのみ込んだ。もとより書いたものを所持できないので、たのまれればその住所を暗記しなければならなかつた。ラーゲルのあちこちで、住所を暗記する姿が見られた。こうして彼等は一同の祝福と期待の内に、日本に向けて出発した。

それから一月経過して第二回目の帰還者氏名が発表された。しかもその数は前回に倍して多かつたので、その中にオルグ団の数名が含まれていたのも不思議でなかつた。

そして第三回目の帰還者氏名が発表された。この調子でゆけば、少なくとも二三回位で全員が帰還できることになった。もう僅かだ



今までの苦勞は一度にけしとんでしまった。誰もかれも思ひは日本の家族の上にあった。ソ連側でもノルマその他のことで何もいわなくなった。毎日の作業は実に楽しく、浮き浮きした気持で一ぱい

であった。

ある日、私が作業から帰り、夕食を終ると衛兵がきて、すぐ装具を括めて衛門に集まれという命令を伝えてきた。何んのことか判らないが、私が衛門に急いでみると、同じように集ってきた者があり、やがてその数が百名位の一団となった。

すると衛兵がきて、君等は第六大隊に転出するのだと教えてくれた。第六大隊というのは、私たちのラーゲルからアングレン川をはさんで、反対側の山の麓にあった。はるか遠くにそれらしい灯りが見える所であるが、そ

こは俗に炭坑大隊と呼ばれていた。つまり第一大隊から私どもの第五大隊までは、露天堀炭田の開発と、それに伴う作業であった。第六大隊だけは地下数百米の坑道にもぐって採炭する作業であった。従って炭坑大隊と聞いただけで、地獄の入口にある大隊であるかのように考えられていた。それにもう一つ第六大隊の特徴は、オルグ団の団長が陸士出身の大垣中尉であることであつた。こんな将校を養成したような陸軍士官学校だから日本を亡ぼしたのだと皆からいわれたものであつた。その炭坑大隊に、私どもが転出を命ぜられたわけで、私はそうと知った時スーッと血の気が引く思いであつた。

午後七時頃、私が衛門に行くと、あちこちの班から同じように集合を命ぜられた者が三三五五集つてきた。やがて私たちの一団は六七十人名になったが、どの顔をみてもオルグ団とは縁の薄い反動分子ばかりであつた。見送りの同僚たちに帰ってもらい、転出の私たちは大地に腰を下してただ待っていた。私達たちは心が重く、お互いに話し合う興味もないままに黙っていた。三年の間、いろいろ

の苦勞を共にしてきた同僚たちともお別れであつた。毎日くぐつた衛門も、今夜の出發を最後に再び訪れることもない筈である。

淡い月光に照らされて、ラーゲルは深い睡りに入っていた。黙々と座り込んでいる私たちは、一応は日本帰還を諦めなくてはならなかつた。同僚の晴れの帰還をみせるのが気の毒なので転出を命じたのかも知れなかつた。しかし誰れも経験したことのない地下の坑道での作業は、思うだけでもゾツとした。

午前四時になつて、ようやくソ連將校がきて、いよいよ出發することになった。私たちは僅かばかりの装具を背負つて、衛門を出て行つた。なれない道を進んでゆくのは泣くに泣けない思いであつた。

私たちの一団が、曠野の中央を流れるアングレン川にさしかかったとき、月が炭坑大隊の裏山に沈んで行つた。私たちの進む道はますます暗く、足もとに気を配って歩いた。懐かしいアングレン川を渡りながら、いつ再び渡つて東の方に進むことがあるか。私たちは一步一步を踏みしめて歩いてゆくと、はるか遠くに炭坑大隊の灯りが見え始めた。



聖典
講義

選 択 集 私 解

その九

借金と念仏

竹 中 信 常

一 お念仏の借金

お金に困った二人の男があった。それぞれの知人に頼んでお金を借りて、急場をしのぐことが出来た。一人の男は、借金をしていると相手に頭があがらぬ弱味があるので、一日も早く返えして、さっぱりとしてしまいたいと思つた。ちょびちょび返えしていたのではまだるこしいから、一遍に全額を返えしてしまおう。それには何かうまいもうけ口をさがさねばならないとばかりに、しばらくの間はガムシヤラになつて方々とんで歩いてみたが、性来なまけ者の癖があるので長つづきせずに、へたばつてしまった。それに、借金ばかり返えしていたのでは、おいしいもの一つたべられない。たまには、返金を自分のせい沢の方にも空費してしまうので、いつまでたつても返済が出来ずにいた。

もう一人の男は、自分が急場を切りぬけることの出来たのも、お金を貸してくれた人のおかげだ。この恩は一生忘れることは出来ないから、早く返済した上で、何とかその恩にむくいようと思つた。しかし、生れつき愚鈍の身で、一時に大もうけをする才覚もない。地道にコツコツと稼いで、少しずつ返済して行こうと考え、毎日の生活費をギリギリに切りつめて、出来るだけのお金をキチンキチンと積み立てることにして、それをおこたらずに実行して行つた。貸してくれた人に恩義を感じ、心の底から感謝して、朝に夕におこたらずにつとめて行つたので、思つたより早く返済することが出来、その後も何かにつけてその人を尊敬することをやめなかつた。

私共のいのちはアミダ様からの借りものである。毎日毎日生きてゆく人生は、一瞬一刻と、アミダ様にお借りした「い

のち」を返済していることになる。借りたものは、いつかは必らず返えし切らねばならないのである。

同じ返済するのなら、一体どっちの男のやり方がいいか。これはいうまでもあるまい。アミダ様に「お念仏の返済」をするのもこれと同じである。返済をするについての実行上の心得、これが第九章段にとかれている。

「念仏の行者四修（ししゆ）の法を行用（ぎょうゆう）すべきの文」なのである。

四つのおこない（修）とは何かというと

一、恭敬修 二、無余修 三、無間修 四、長時修

である。借金の返済にたとえていうならば、恭敬修とは、相手を敬い、貸してくれた恩に感謝し、かえしてしまえば赤の他人だなどという傲慢な考えをおこさないことである。無余修というのはひたすら借金の返済のためだけ働き、かりにも自分のせい沢のために働こうなどとはしない。無間修というのは、一ぺんに全部かえそうとしたり、思いついた時だけ馬鹿働きをするのではなく、つねに心がけて、少しも忘れることとなしにはげむことである。長時修とは、上の三つのおこないをたえ間なく長い間、すなわち借金が返済出来るまで、ということとは弥陀の極楽浄土に往生するまでつづけることである。そして、借金の返済ということを「お念仏」ということ

に入れかえるならば、それが第九章段にとかれている「四修章」の大意ということになる。

ただ、ここに二つの問題がある。その一つは、借金を返えそうとすること、あるいは、返えさうとして働くということとは、浄土門でもっぱら嫌う「自力」の色彩が強いのではないかということである。ところが、そうではないのである。なる程うわべを見ると、借金を返えそうとして働くことは、自分の意志で自分の力のようにみえる。しかし、すでに借金しているのである。弥陀の本願業力というお金を借りてそのおかげを蒙っているのである。だから、そのおかげにむくゆるのは「自力」でも何でも無い、やはり、アミダ様のお力によるものなのである。自分の力で返えそうなどと思うのは、太陽の光りを浴びて、その暖かさ明るさを、自分の力によるものだとうぬぼれる恩知らずと同じである。

もう一つの問題は、借金の返済は早くすべきであらうし、一度に沢山返えした方がいいだろう。お念仏をとなえるのもこれと同じではあるまいかということである。このことについては宗祖も次の如くにいましめられている。

「但し、一万をもいそぎ申し、さてその日をくらさんことあるべからず。一万なりとも一日一夜その所作とすべし。総じては一食の間に二三度ばかり思い出さんはよき相続にてあ

るべし」(和語灯録卷四)

一日一万遍を急いでとなえて、あとは何もしないというのではなしに、一日一夜のつとめとしてゆるやかに、絶え間なく、食事の間にでもつづけよというわけである。そしてまたこうもおおせられている。

「数遍の多からんにはしからず。詮ずる所、心をして相続せしめんがためなり。必ずしもかすを沙汰するを要とするにはあらず。ただ常念のためなり。数遍を定めざるは懈怠(けだい)の因縁となるが故に数遍をすすむるなり」(諸問答)

二 重い念仏

誠意をつくして借金返済に努力しても、その方法がうまくないと、まごころも通じないことになる。

そこで、自分が一生懸命努力しているその努力の仕方が、正しいかまちがっているか、知りたいものである。極楽往生を願う方法も色々あるが、どれが本当に仏様のお心になったものかはっきりと知りたいと思う。第十章段の

「弥陀化仏来迎して聞經の善を讃歎したまわず、唯念仏の行を讃歎したまうの文」

はここを簡明に説き示めされているのである。すなわち觀無量壽經の文を引用して、その方法の間ちがっていない

もののところへは化仏化菩薩が遣わされて

「善男子、汝仏名を称するが故に、諸罪消滅す。我來りて汝を迎う」

と讃歎されることを述べている。逆にいうならば、前に述べた四つのつとめをと切れることなくつとめていけば、すなわち称名念仏さえしておれば、必らず彼の国に往生することが出来る。少しづつでも、おこたりにく返えしていれば、いつかは全部返済し切れるということになる。たとえその負債が「五十億劫生死の罪」であっても、南無阿彌陀仏の唱名の、「返済」によってなくすことが出来る。

しかし、称名念仏以外の方法ではダメである。せいぜい、「千劫極重の惡業」ぐらいしか返済することは出来ない。では、なぜ「お念仏なら返済出来て、ほかの、たとえばありがたいお經の題目をきいたりする(聞經)ことではダメなのか。ここで宗祖は次のようにはっきりと述べられているのである(大意)

「わたくし(宗祖)がおもうに、聞經はアミダ仏の本願ではなく、雜業——念仏以外の行為であるが故に、仏・菩薩もほめてはくれない。念仏の行こそはアミダ仏の本願の正業であるから、仏様はほめて下さるのである。その上、聞經と念仏とは、おかした罪の消え方に多い少いがある。善導大師

の観經の疏という書物に、どうして十二種類もの沢山のお經を聞いても、除かれる罪はたった千劫なのに、アミダ仏の名をとる場合には、それがたった一べんであっても、五百万劫もの罪が消えるのか、という疑問に答えて、罪ばかり作っている人は色々往生するためのすなおな心になり切れず、その上、臨終になると死の苦しみがせまって来る。従つて、沢山のお經を説き聞かせても、これをうけいれる心が浮つき、散乱してしまふ。それだから、罪を全部消すことが出

来ぬ。仏様の名はたった一つ「アミダブツ」というだけだ。どんな散乱した心も、この簡単な名前を称念すれば自然これに統一されるようになる。また念仏は心をおちつけて、ガツチリとするゆえに、奥深いところの罪業にまでとどき、これをとりのぞくことが出来る」

重い念仏で軽々しく散乱する心をおさえつける。これが念仏の功德というものであらう。

四種類の性格

人の性質にはいろいろとあり、

また入口のわからぬ藪のように、わかり難い。しかし凡そのところ四種類に分けられる。

第一には自ら苦しむ人である。

これは間違つた教えをうけて、苦行したり、享樂にふけつたりする人である。また金銭こそ世の宝と信じている守銭奴や、儲けてもまだ足らぬと思う強欲な人がある。あるいは外見を飾って自分を偉く見せかけることに苦勞し、他人の

思惑ばかり気にする人がある。これらは何れも自分で自分を苦しめている人である。

第二には他人を苦しめる人である。生物を殺したり、盗みを働いたり、その他いろいろ他人に対

して酷い仕業をする人がある。特に自分の楽しみのために生物を殺したり、ものを盗んだりして、しかも平気でいる人がある。また相手の人格を尊重しないで自分本位にしか考えない人がある。他人に迷惑をかけるばかりでなく、自分の時間を浪費し怠けることも自分の

損ばかりでないと知るべきである。あるいは人を偽る者がある。他人を信用しようとしないう者があ

つた考え方に立つて行われたとしたら、これまた自ら苦しむ他をも苦しめることとなる。社会の道徳や規則に反しても、自分の考えを押し通さうとする人がある。また他人の犠牲を強いるような考え方を

する者がある。これらは何れもをも苦しめる人がある。人の上に立ち、人を指導すべき地位にある人、間違つた教えを受けて、苦行をしたり享樂にふけつたりする人がある。これは自らを苦しめる

社会的に苦しみを与える人である。第四には自らも苦しまず他を苦しめない人である。前にのべた人たちは反対の人のことである。欲を離れて安らかに生きる人である。仏の教えを守って、清らかな行いをしようと努力する人である

三 花 と 薬 と 友

この頃はすこしすたったが、ひとところ小説や映画の題に「何々と何々」というのがはやった。最近でも、浄土宗出身の武田泰淳氏の小説には「花と花輪」という題がつけられている。いささか文学カブレして選択集第十一章段

「雑善に約対して念仏を讃歎する文」の章意を要約すると、

「花と薬と友」

というふうにみることが出来る。

花とはフンダリ華という、世にもたぐいまれなる美しさを持つ花で

「その色は雪の如く銀の如し、光は人目を奪う。その香また大なり。多くかの池に出づ」とお経の中に述べられている。白蓮の一種であって「希有花」ともいわれる珍華である。お念仏を唱える人は、このフンダリ華と同じように美しく、香り高く、清らかであるというのである。

薬（くすり）というのはアカダといって、どんな難病奇病をも全治さす、不思議な効力を持つくすりのことである。別名「不死薬」とも呼ばれる丸薬である。お念仏の功德はこのアカダ薬にも勝るもので、どんな深い罪をおかしたもので

も、これを救いにとって極楽に往生させることが出来るというのである。

友とは勝友、すなわちすぐれた友達のことである。われわれが持つ「飲み仲間」とか「悪友」というのとはわけがちがう。しかもこの友達はずつうの「人間」ではなくて、観音ボサツと勢至ボサツなのであるから、悪かろうはずはない。念仏を一生懸命にとなえるもののために「友達になって、よく面倒をみてやれ」とアミダ仏から命令されてやって来た、いわば「お学友」なのである。

生きてこの世にある間は、人中の妙華フンダリ華として清く美しく、かつアカダ薬を服用しているから、肉体の病氣は勿論のこと、心のやまいにそまることもなく、楽しくくらすことが出来、しかも二人のボサツに守られ、導かれての毎日であるから、その生活はますます高遠の度を加えてゆく。こうして現在に念仏の功德をうけるとともに、いのち終れば浄土に往生し、やがては仏としての果報もうけられるという、未来の功德も予約されているのである。

こうしたことを、アミダ仏のほかに、シャカ仏までもがわざわざやって来て、約束して下さっているのである。念仏者として、どうして、念仏以外の雑なおこないをすることが出来ようか。（文学博士）

はなまつり用品

はなまつりのしおり

〒十五円

五色刷 B 6 版五枚綴

リボン付のかわいい施本

三〇部より単価十五円送料サービス
百部より 〃 十三円 〃

— みほとけのおしえ —

よいこのいっしゅうかん

〒三十円

花祭り／入園式／卒業記念の施本に好評
百部より貴名・行事記念名の印刷および
送料をサービスいたします

◇見本のお申込みは郵券でおはやめに◇

発行所 東京都千代田区 飯田町 2 の 8 大 道 社 振替・東京 8 2 4 7
TEL <332> 5944

◇日日の修養と無言の布教◇

修養ひめくり

価 格 100 円 送料実費
(10部以上割引あり)

美麗 2 色刷 32枚綴 上質紙使用

法要その他の記念品に最適 (箱入・寺名等刷込の相談に応じます)

申込先 東京都千代田区 飯田町 2 の 8 法然上人鑽仰会 振替 東京 82187
電話 (332) 5944

「浄土」講読規定

一部 定価 金五十円

(送料 六円)

会費一カ年 金六〇〇円

(送料 不要)

浄 土 三 月 号

昭和十年五月廿日

第三種郵便認可

昭和三十七年二月廿五日 印刷

昭和三十七年三月一日 発行

定価 五十円

編集人 村 瀬 秀 雄

発行人 佐 藤 密 雄

印刷人 関 二 三 男

印刷所 新光社印刷株式

会社

東京都千代田区飯田町二ノ八

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京三三二局五九四四番

振替東京八二一八七番

大正大学

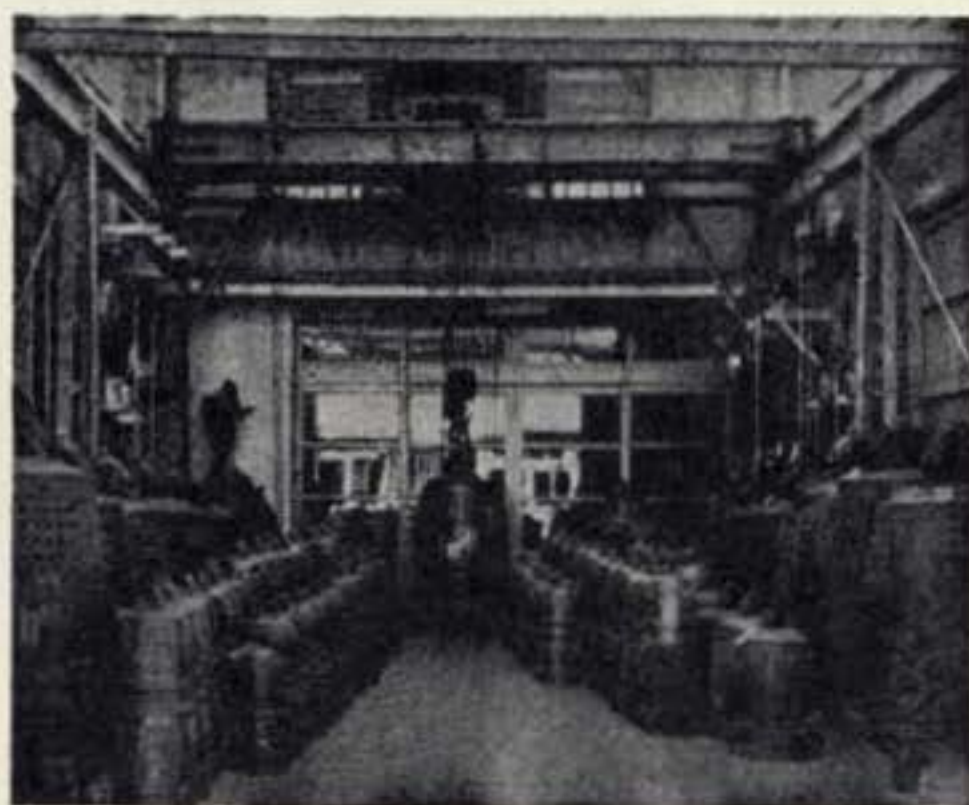
学長 青木道晃 東京都豊島区西巢鴨四丁目

- 特色
1. 西と東、右と左の中道を行く仏教精神が本学建学の基礎である。従って、穏健中正、操守高き学生を育成することを目標とし、教授凡てが身を以て指導している。
 2. 学生は、入学と同時に専攻別による13の研究室に所属して夫々の教授から指導を受けるほか、研究室の豊富な蔵書を利用して勉強できる。

専攻

文学部＝国文学、英文学、史学、西洋哲学、宗教学
中国学、社会学、社会事業の8専攻
仏教学部＝仏教学、梵文学、天台学、真言学、浄土学の5専攻
大学院＝修士コース、博士コース（仏教学、宗教学、国文学）

昭和37年度1年の募集人員は200名、試験科目は、国語（漢文をふくむ）社会、外国語（英、独、仏のうち一つ）
試験期日 3月27日・28日（火・水）詳細は入学案内を参照のこと



日本最初の黄綬褒賞
（昭和三十年四月廿七日）
鋳物師 老子次右衛門翁

大阪市北区曹根崎町一丁目
大阪ヨリ十五分（梅田新道大映横東へ一丁右側）

株式会社 老子製作所 大阪支店

電話大阪 04 8847番 本社工場 高岡市横田

梵鐘（45cm～85cm）
在庫豊富

喚鐘（12cm～51cm）

音響物理学博士青木一郎先生

梵鐘界の権威 日展参事香取正彦先生
芸術院賞受賞

日本一の生産・設備